たが、味方はわざとこれに應せず。高粱の茂つて居る中を、息を殺して敵に迫まり、やがて二百米突斗りの距離に成つてから、不意に突貫を初めまして、怒ちの中に小寒坡嶺を奪ひ、更に進んで大寒坡嶺に向つたのです。

所が此地の敵兵は、味方よりも數が多く、その上一生懸命に陣地を守つて、味方を撃退しやうとしますから、椙原隊も容易には進めず、暫時は苦戰の有様でしたが、幸にして戸澤大隊が、本隊から援兵に駈けつけましたので、これに非常の勇氣を得、曉方の六時頃には、大寒坡嶺の要害も、遂に我手に落ちました。

それから右縦隊の一番左には、竹下枝隊が當つたのです。これも二十五日の夜に乗じて、直ちに八盤嶺の敵に向ひ、殆んど一發も放さぬ中に、直ちに突撃に掛りましたが、中には古の合戰の様に、銃剣を棄てゝ組討をする者さへあり、入り亂れて奮闘した揚句、とう

とう敵を破りましたから、更に勝に乗つて、西の方の谷間に追詰め椙原隊が三家子を占領したと同時に、竹下隊は八盤嶺から、七盤嶺の要害をも、見事に占領してしまつたのであります。

かう云ふ風に、右縦隊の諸隊は、勇敢無雙の働きを以て、敵の恃んで居た要害を、皆奪ひ取つてしまひましたが、敵はまた此勢に、その守を棄てましたのを、殘念に思つたと見えまして、二十六日の午前十一時頃には、兵力を非常に増して、安平の方面から、さながら潮の湧く如く、我に向つて逆襲を試みました。

第四章　太子河左岸の占領

此時敵の砲兵は、三十七門の砲列を、安平附近の高地に敷いて、我が大寒坡嶺の陣地をば、盛んに撃ち立てましたので、我山砲隊も直ちにこれと砲火を交へましたが、何分敵は優勢なので、思ふ様に

威力を見せる事が出來ません。

其所へまた敵の主力が、本街道を繰り出して、續々此方へ向つて來ますから、我軍は少しく危險の地に立ちました。恰も此時屏風山に向つて居た、原田大佐の率いる枝隊が、大急ぎで駈けつけて、此所に大突擊を行ひ、一擧に勝負を決しやうとしましたが、生憎には大雷雨が起つて、四邊が暗く成つてしまいましたから、餘儀無く雙方とも砲火を收めて、暫く睨み合ふ事に成りました。

明くれば二十七日、原田枝隊は朝早くから起つて、昨日攻め掛けておいた屏風山に、又もや攻擊を試みました。

で、八時三十分頃には、その一部を占領し、更に進まうとします所へ、三家子の北手の敵が、高地から側面を射擊するので、此爲めに妨げられ、一歩も進む事が出來ません。

けれども味方は更に屈せず、今度は方面を更へまして、岩を攀ぢ

石を這ひながら、東北の山腹を廻つて、どつと敵に攻め掛りましたから、流石の敵もこれに驚き、遂に午後三時を以て、此陣地を明け渡してしまひました。

又左翼の今村部隊は、中央縱隊と連絡して、三家子附近の敵を追ひ、大安平の近所から、東に亙る高地を占めましたが、同じく二十七日には、前面の敵の兵力が加はり、容易に進む事が出來ません。

尤も此時此隊は、今までの今村大佐に代つて、島村少將がこれを率いて居ましたが、丁度午後の三時頃、敵の退却の樣子を見て、總進擊の號令を傳へました。

かくと見た原田枝隊は同時に屹立山に向つて攻擊を初めますと、敵は三家子の北方の山に、頑固にも踏み止まつて、暫時抵抗を試みましたが、五時頃にはもう力盡きて、一散に逃げ出しましたから、遼陽の右側の敵の防禦は、皆我軍の破る所と成り、敵は一散に遼陽

をさして、逃げ込まねば成らぬ事に成りました。

そこで我右縦隊は、二十八日の紅沙嶺を越えて、勢鋭く進みましたが、もう此時は敵兵も、只退却する斗りですから、夕方までには目的の地を占め、更に一部の兵を派して、太子河と湯河の合して居る、半島形の所まで占領しました。

所がその左翼隊のみは、中央縦隊と共に進まねば成らぬので、大石門嶺から石咽子に亙る所を、まだ十分に占領する事が出來ず、而も石咽子の北の方かちは、頻に砲彈が來ますから、我軍は谷に沿ひ岡に隱れ、辛くも前進が出來た位です。

其中に此隊も、見事敵を追ひ拂つて、遂に太子河の左岸まで出ましたが、此所から見ると遼陽の市街は、つい眼の前に横はり、茫々とした遼河平原を、黑煙立てゝ走る汽車までが、手に取る樣に見えますので、士卒の元氣また百倍し、思はず萬歳を叫びました。

第五章　太子河右岸の激戰

さて右縦隊は、太子河の左岸から、湯河と落合ふ所まで、皆手に入れてしまひましたから、今度は其右岸に屠る、敵の樣子を探る事に成りました。

然るに敵も、此河を渡られては成るまいと、それ〴〵手配がしてある樣子ですから、智略に富んだ黑木大將は、陽に下流を押し渡る風をして、實は上流の淺瀨を見屆け、まづ梅澤枝隊と云ふ別働隊を最も上流の臥龍村から渡つて、本溪湖の方へ向はせ、また工兵隊を黑峪に集めて、江家屯の近邊に、大きな軍橋を架けられる樣に、十分用意をさせました。

そこで三十日の夜半には、前衞の木越隊が、鎌刀灣から太子河を渉り、直ちに燕巢城の岡に出て、架橋工事の掩護をする事に成りま

した。

一體敵前に橋を架け、それを渡つて行く事の、非常に危險な仕事であるのは、已に鴨綠江の戰でも知れて居ますが、殊に此時の木越隊は、只に架橋を掩護する斗りか、事に依つたら遼陽の敵の、退路を遮らうと云ふのですから、その任務はまた非常に重いのです。

然るに大膽なる木越隊の、掩護宜しきを得たものですから、我が架橋隊は、三十一日の夜明までに、鐵の舟で造つた軍橋を、二條まで見事に架け了りましたので、その午前八時頃から、右縱隊まづこれを渡り、續いて中央縱隊の、岡崎部隊が渡つて行きました。

✿ 太子河右岸の激戰 ✿

するとその大軍が、已に太子河を渡つたのを聞きまして、敵は大きに狼狽へ出し、俄かにその大軍を擧げて、此の黑木軍へと當らせましたが、その勢凡そ我が數倍、容易ならぬ事に成つたのであります。

で、黑英臺の敵砲と、寒屯の我が山砲とは、頻りに砲火を交へましたが、それ等は物の數にも成らず、越えて九月一日から、非常な大激戰と成りました。

★ 遼陽の卷 ★

此時敵は、優勢なる兵を以て、茨兒山附近に陣を占め、我が側背を猛射しましたので、我が右翼の島村部隊は、方向を更へて是に向ひ、午前の中に五頂山を占領しましたが、何分敵が頑强なので、それよりは進む事成らず、心ならずも此所に夜を明かしたのです。

その間に、第二師團の粹を集めた、中央縱隊の岡崎部隊は、馬場大佐を右翼に將とし、谷山大佐を左翼に將として、午前六時に寒屯を發し、黑英臺の西北にある、饅頭山へと進擊しました。すると又敵は黑英臺、水光寺の陣地から、斷えず砲彈を送りますので、容易に攻取る事が出來ず、その中に日が暮れました。

其所で岡崎部隊は、原田枝隊と力を合させて、闇に乘じて夜襲と

定め、敵前五十米突まで進んで、一齊に火蓋を切りました。

然るに敵も去る者ですから、此所を取られて成るものかと、最も勇敢に防戰し、果は兩軍入り亂れて、吶喊の聲、銃劍の響、山も崩る許りでありましたが、其夜の十二時頃に成つて、遂にその饅頭山は、我軍の手に歸したのであります。

が、元より此所は敵に取つて、最も大切な所ですから、一旦我手に渡しましたが、何でも取り返へさねば成らぬと、二日の午前十時頃には、猛烈なる砲擊を初め、我が守備兵の頭の上から、榴散彈、曳火彈を、雨霰と浴せ掛けましたので、その爲めに我死傷は、見る見る中に數を增して、目も當てられぬ有樣に成りました。

第六章　名譽の岡崎山

此時隊長馬場大佐は、三面から猛烈な砲擊を受けながら、泰然と

して少しも動かず、よく部下を勵ましましたので、士卒も亦勇を鼓して、骨に成つても此所は退くまいと、一生懸命に守りましたが、その中に夜に入りますと、果して敵は逆襲して來ました。

で、その初は谷山枝隊に向つて、一度ならず二度までも、勢鋭く攻め掛りましたが、凡そ二時間許り奮鬪して、一とまづこれを退けますと、今度はまた馬場隊に押し寄せ、此所も亦追拂はれました。所が第四回目には、非常に猛烈な勢で、また馬場隊に向ひましたから、此方も必死の力を出して、これに向つて奮鬪し、辛くも追拂つてしまつたのであります。

すると敵はこれにも懲りず、翌三日の午前二時には、更に第五回の逆襲を試みました。而も今度は兵力を增し、喇叭を吹き、太鼓を叩き、隊長自ら先に立つて、関の聲を揚げながら、勢激しく攻め登つて來ましたから、我軍は皆山上へ出て、さながら夕立の降る如く、

一度に射撃を食はせましたが、それでも屈せぬ敵兵は、屍を踏み越え、乘り越えながら、我陣近く進んで來るのです。

其所で此方も射撃を止め、『前へ！』の號令諸共に、潮の樣な敵の中へ、面も振らず割つて入り、縱横無盡に突き立て、斬り立て、彼の摩天嶺の時にも劣らぬ、凄まじい白兵戰と成り、敵も味方も之が爲めに、非常な損害を受けましたが、やがて敵も疲れたと見えて、一旦引揚げてしまひました。

其中に夜が明けますと、敵も昨夜の五回の逆襲に、大いにその兵力を費やし、且つは我兵の勇猛なのに、よく〳〵驚いたと見えまして、遂にこの陣地を引揚げましたから、是に於て饅頭山は、全く我が軍の有と成りました。此時からして此山を、更に岡崎山と云ふのであります。

寡兵を以て大敵を引受け、前後五回に及ぶ逆襲を、毫も屈せず追

拂つて、遂に占領を確實にした、岡崎部隊の戰功は、實に千古に絶したと云ふべく、その名を以て此山に冠らせ、永く名譽の記念にしたも、決して無理ならぬ事であります。

さて岡崎部隊は、かくして此山を占領しましたが、見渡せばその前面には、已に野津軍奥軍に破られて、此所まで逃げて來た敵の大軍が、雲霞の如く見えますのを、まだ進んで擊つ事が出來ません。

所へ左縱隊の近衞師團は、九月四日を以て到着しました、一體この左縱隊は、野津大將の中央軍と、相提携して働いて居ましたので、その爲めかう後れましたが、その代り右縱隊や中央縱隊の樣に、嶮しい山道を來ませんでしたから、野砲も十分に持つて居ますので、先きに此所に居た二個の縱隊も、此の到着に非常の力を得、卽ち此隊を總豫備隊として、右縱隊と中央縱隊とは、直ちに前面の敵に向び、大攻擊を行ふ事に成りました。

第七章　激烈なる追擊戰

大攻擊の命を受けますと、右縱隊は英城子に、中央縱隊は三道覇子に進む事に成り、午後十時と覺しき頃、暗を衝いて出發しましたが、此時已に木越部隊は、立林溝まで進んで居ました。

又島村部隊は、同じく十時に陣地を立ち、その今村枝隊は、また小道嶺を占領し、進んで大道嶺に向はうとしますと、右翼に向つた椙原枝隊の方で、盛んに銃聲が聞えますから、急いでこれへ援兵に行きますと、忽然としてその左側から、敵の一齊射擊をうけました。

それで此方からも突擊し、難無くこれを擊退しましたが、何しろ暗夜の事ですから、敵は退路を誤つて、我が後方の輜重隊に向ひ、頻りに銃火を送りましたので、元より戰鬪力の無い輜重隊は、此爲めに一時に亂れますと、是を聞いた島村少將は、自ら馬を陣頭に進

めて、士卒を勵まし鬪ひます中に、敵も味方も暗に紛れて、勝たか敗けたか解らなく成つたのです。

其中に夜が更けて、月が漸く昇りました所で、初めて氣が付いて見ますと、我が左側には敵が在り、敵はまた其背後に、我軍の在るのに驚きましたが、果は雙方相迫つて、又もや此所に入り亂れ、激しく奮鬪する事に成りました。

けれども一度破れた敵は、長く踏み耐へる事が出來ず、遂に全隊が足元を亂たして、一散に逃げ出しましたから、我軍はすかさずこれを追つて、息も次がせず攻め立て攻め立て、とう〳〵四日の夜半頃には、遼陽の城廓まで迫つて來、翌五日には、めで度く遼陽に乘込みました。

尤も敵軍は、此間からの接戰に、段々守を奪はれましたので、とても敵はぬと思ひましたか、已に九月二日を以て、退却の準備を初

め、まづ我第一軍、即ち右翼軍の側面攻撃には、如何に猛烈な突撃を受けても、決して退く事の無い樣にと、さてこそ兵力を十分に備へ、その間に他の兵を繰り出して、巧みに退却をしたのであります。

尤も敵は、折角嚴重の防禦線を張りながら、思ひの他長くは守らず、その全力を出さぬ中に、かく退却してしまひましたのは、卑怯の樣でありますが、是と云ふのも、我が右翼の黑木軍が、勇敢無比の勢を以つて、嶮山を越え、大河を渡り、豫定通り敵の背面を脅かして、この荒肝を挫いだからであります。

それと同時に、この黑木軍と氣脈を通じて、始終豫定の戰略を誤らず、敵の正面及び右側を擊つて、散々にこれを擊ち破つた、野津軍及び奥軍の功績も、決してこれに劣るのではありません。

第八章　野津軍の戰況

旅順の明渡し

進突の兵騎

露都の暴動

狀況の繪畫

さても遼陽攻撃の中央軍は、川村中將の第十師團を右縱隊に、上田中將の第五師團を左縱隊にして、野津大將これが司令官と成り、八月二十六日を以て、桥木城の司令部を發し、侯家屯附近まで進んで、鞍山店に據つて居る敵と、まづ砲火を交へました。

一體この鞍山店は、遼陽の前面に於ける、屈竟の防禦陣地でありますから、敵も多數の兵を集め、此所を先途と防ぎましたから、戰爭も亦激烈を極め、其爲めに桂聯隊長まで、名譽の戰死を遂げた位であります。

けれども長くは食ひ止める事出來ず、翌二十七日の午前には、とう〳〵退却してしまひました。最もこの鞍山店には、奥大將の左翼軍も、共に向つたのでありますから、占領の後は、左翼軍に此所の守備を委かせておき、野津軍は直ちに進んで、敵兵の追擊に掛り、二十八日の午前には、八卦溝から調軍臺まで、敵を追詰めて來まし

たが、此時左縱隊は、始終東清鐵道の線路により、また右縱隊は、それより東の高地を越えて、七嶺子まで進んだのであります。

すると敵は、我が攻擊の猛烈なるに堪へず、亂れに亂れて敗走し、遼陽から三里手前の、潘家爐まで來ますと、此所の守備兵と一所に成つて、又我軍に抵抗しましたのを、又もや手强く攻め立てゝ、やがて此所をも占領しました。けれども地形が惡く、味方の進擊する所が、敵の前に露出に成るために、始終雨の樣に彈丸を被つて、其爲めに我が損害も、決して少くは無かつたのです。

明くれは二十九日、我軍は更に進んで、來家堡から黑牛莊に亙る高地の一帶を占領しましたが、此所から遼陽はもう二里半。今に其地も手に入るのかと、士氣は一層振ひ立ちました。

此時黑木軍の淺田縱隊が、此方と結んで付いて來ましたから、此方の、左縱隊は、また奧軍の右縱隊と連繫し、此所に三軍が一致して、丁度鶴の翼の樣な陣形に成り、いよ〳〵大攻擊に掛りましたのは、八月三十日の事であります。

尤も廿九日の中に、我が有力なる砲兵隊は、來家堡の高地に陣を敷きましたから、此所から其の日の午後四時頃には、前面の敵陣を目かげて、轟然と一發喰らはせました。是ぞ遼陽攻擊の、幕明の合圖と云ふものでした。

されば又敵からも、負けぬ氣に成つて應砲し、次第にこの勢を增して、果は非常の激戰に成り、雙方から擊ち出す彈丸は、天に響き地に轟いで、凄まじい有樣に成りました。

折から大きな紙鳶の樣な物が、敵の陣から飄然と揚りました。是は軍用輕氣球なるもので、敵はかうして我が陣地の樣子を、上から見おろさうと云ふのです。

憎き敵の振舞よと、我軍からは又その輕氣球を狙つて、頻りに彈

丸を飛ばせましたが、何分高い空に在るので、思ふ樣には擊てません。

所がこの輕氣球が下りると、敵の照準が初めて確かに成りました ので、此方も決して油斷無く、頻りに是と戰ひましたが、その中に日も暮れかゝりましたから、一とまづ砲戰を見合はせました。

明くれば即ち三十日、三軍一致の力を持つて、遼陽の大敵に當る日であります。

我中央軍は、夜の明けぬ中から行動を初め、方家屯、新立屯等に據る敵と、相對して陣を構へました。

見ると敵は、昨日の戰に鑑みまして、約百門の砲を並べ、其上遼陽の本部から、新たに大勢の援軍を寄せて、此所に大決戰をしやうと云ふ意氣組です。

其所で我が右縱隊の一部は、まづ早飯屯の高地の敵を、一度に擊

破つて進まうとしますと、敵の後の方に居た大部隊は、其陣地を取り返さうと、非常な勢で押し寄せて來ましたが、其勢凡そ二箇師團餘り、右縱隊を押し包んで、無二無三に攻め立てますので、その爲めに我隊は、淺田縱隊との連絡を失ひ、容易ならぬ苦境に陷りました。

けれども將卒の勇猛なる、一歩も此所を退かず、奮戰力鬪を極めますと、その効あつて午後三時頃には、淺田縱隊と連絡する事が出來、力を合はせて敵に當りましたから、茲に戰爭は增々激しく、何時果てるとも知れませんでしたが、日はその間に傾いて、終に此日は此戰場に、夜を明かすと云ふ事に成りました。

されば三十一日も、昨日と同じ陣形で、午前六時から砲擊を初め、その砲煙の下を潛つて、歩兵は頻りに進擊を試みましたが、何分敵の防禦地が堅固で、容易に拔く事が出來ないのです。

所へ駈けつけて來ましたのは、重砲兵の一隊で、新たに左翼軍から此方へ廻はり、櫻桃園の東北の、谷の間に砲列を敷き、新立屯、方家屯等の敵陣を狙つて、勢鋭く擊ち初めましたが、是には敵の砲火も、稍痿んで見えましたから、其機を外づさず我隊は、砲壘に向つて進擊を試みましたが、此時もまだ捗々しい勝利は無く、やがて此日も暮れてしまつたのです。

其中に左翼の奥軍は、三十一日の夜半から、砲兵の全力を擧げて、猛烈に前面の敵を射擊し、次いで總强襲に移つて、九月一日の夜明迄に、新立屯の西の高地を初め、首山堡西方の高地まで占領し、漸く遼陽の關門を破りますと、中央軍も此機に乘じて、退却する敵を追擊し、タテブチフから東西八里莊を占め、直ちに遼陽の城廓に迫りました。

然るに敵は、又もや城外の堡壘に據つて、我が軍を食ひ止めましたが、此砲壘には敵も全力を注いだと見えて、今までに無い堅固な上に、必死に成つて防ぐのですから、我軍もこの攻擊には、大分骨が折れたのであります。

で、一日、二日、三日と、手强く攻め立てたのでありますが、まだ敵は退きませんから、此上は損害を顧みず、斷然大突擊を行つて、此城廓を破る事に定め、遂に午後六時を以つて、猛烈な敵の砲火を侵し、堅固な防禦物を乘り越え ドッと斗りに突擊しましたが、やがて右縱隊は南門から、左縱隊は北面から、遂に遼陽城に攻め入つて、一度に帝國萬歳を唱へましたのは、實に九月三日の夜半でありました。

第九章　奥軍の活動

茲にまた左翼軍は、奥大將の指揮の下に、同じく八月二十六日を

以て、大飛躍を初めました。

小川中將の左縱隊は、二臺子、三臺子の牛莊街道から、大久保中將の右縱隊は、烟臺甘泉堡の遼陽街道から、大島中將(義昌)の中央縱隊は、三里橋、石頓山子を經て、寶石山子の方面に向つて、肅々と歩を進め、まづ敵の要害と頼む、鞍山店の敵を掃ひに掛つたのです。

✽奥軍の活動✽

然るに此陣地の敵は、此前野津軍に攻められて、大分弱つて居る所でしたから、この奥軍の進擊を見ると、一支へも試みず、後の方へと退却しましたから、難無く此所を占領しました。

一體此の鞍山店には、大部隊の敵が據つて居ましたので、さてこそ奥軍も、初めにその全力を擧げて向ひ、此所で大戰爭を行る心算でありましたのに、思の外早く逃げたのは、張合が拔けた事でした。

けれども留まる所ではありません、凡そ四里ほど前にある、沙河をさして前進し、二十七、八日の二日とも、專ら敵を追擊しながら、

陣地を進めて行つたのであります。

★遼陽の卷★

此時中央の大久保縱隊は、二十八日の正午前に、新家三臺子から、揚起堡に亙る一線を奪ひ、砲八門を鹵獲した位。それと同時に右縱隊も、八卦溝の敵と猛烈に戰つた後、これを擊退してしまひましたが、左縱隊の方面ばかりは、別に敵の抵抗も無く、白旗堡の北まで進み、此所で三隊とも相茲んで、沙河の邊に陣取る事に成りました。

敵はと見れば、沙河の北二里斗りの、首山堡の高地を初め、新立屯、方家屯、黑牛莊の村落に連なる一帶の高地に據つて、頗る堅固な要害を構へ、我が前進を遮らうとして居ります。

此を見て我軍は、二十九日一日を、此陣地に留りまして、隊伍を整へ、部署を定め、いよ〳〵明日は一擧して、この大敵を擊ち破るぞと、上は司令官、師團長から、下は下士兵卒に至るまで、元氣天を衝くばかりであります。

第十章　首山堡の苦戰

抑も首山堡と云ふ山は、昔唐の太宗の、行在所であつたと云ふので、別に駐蹕山とも呼ばれる名所ですが、三方に平野を控へ、頂上には煉瓦造の展望臺も出來て居る、一際聳えた高地ですから、此所を味方に奪つてしまへば、非常な利益がありますが、その代り敵に據られて居る間は、味方の前進が思ふ樣に出來ません。

さればこそ我が軍は、右と中央の二箇縱隊を以て、極力これを攻める事に成りましたが、その初めは例の砲戰で、盛んに彈丸を浴せかけましたが、先方も頻りに砲彈を降らせて、容易に動く色もありません。

此に於て我が中央縱隊は、いよ〳〵夜襲と決心し、三十一日の午前一時、その右翼は南の麓から登り、左翼は孤家子の方面から、直ちに敵壘に迫る事に定め、やがて敵の防禦物に近づいて、地雷火の線を切り、鐵條網を破りにかゝりますと、敵は此物音を聞き付け、一分間に六百發出ると云ふ、鋭利な機關砲の火蓋を切りましたので、此爲めに我軍は、面を向ける事さへ出來ず、見る〳〵中に味方の死骸は、此所や彼處に山を築きました。

かう云ふ風で一歩も進めませんから、餘義無く敵と睨み合の儀で一夜を明かす事に成りましたが、元より戰場の事ですから、飯も食へねば、水も飲めず、その苦辛は一通りでありません。

然るに敵は、更に我が左翼隊の左に廻つて、孤家子の北西に出やうとする樣子ですから、是では成らぬと云ふので、左縱隊の小川師團は、道を轉じて應援に來ましたが、首山堡から發射する敵彈は、此へも夥しく降り掛つて、その爲に小川師團長は、野口參謀長と共に、彈片に中つて傷を受けました。それは三十一日の、午後三時頃

の事であります。

此の有樣でありますから、中央縱隊の苦戰の程は、殆んどその度を極めまして、聯隊長江口(昌條)を初め、加藤(錬太郎)平山(信夫)竹內方山)の三大隊長も、それ〴〵皆傷いて、遂には大尉が聯隊長に代つて、全隊を指揮したと云ふ位です。その激しさ凄まじさ、思ひ遣られるではありませんか。

第十一章　悲慘なる關谷聯隊

苦戰は中央縱隊に止まりません。同時に東南の高地から攻め掛けた、右縱隊の第三師團も、非常な困難を極めましたが、中にも關谷大佐(銘次郎)の率ゐた、靜岡第三十四聯隊の如きは、實に悲慘を極めたのであります。

此關谷聯隊には、彼の廣瀨中佐に對して、陸軍の軍神とまで崇められた、橘少佐(周太)も居りましたので、少佐は大隊長として眞先に進み、關谷聯隊長はこれに續いて軍刀を打ち振り、〈〈、頻りに突貫の命を下だしますと、敵は我が聯隊旗を目ざして、重砲彈をバラ〳〵喰はせ、その下を潛つて猛進すれば、今度は小銃の彈を亂射して、面を上げる事も出來ない位。その爲めに我軍は、夥しい死傷を出し、聯隊長の邊に在るもの、僅か二十名位に成りましたが、それにも屈せず進みます中に、また敵彈に斃されて、果はたつた八人に成つたのです。

此時關谷大佐は、旗手の中山少尉を顧みて、『今は余は死を決したから、君はその聯隊旗を守つて、急いで他の隊へ行つて、我が聯隊の名譽を全うしてくれ！』と、思ひ入つた言葉を殘し、猶も進んで鬪ひます中に、とう〳〵戰死を遂げてしまひました。

是より先橘少佐は、狼牢、鐵條網などの防禦物を踏み越え、機關

砲亂射の下を潛り脱け、慕地に突貫して、山上の敵を擊退し、日章旗を其所に樹てましたのは、まだ八月三十日の、旭も登らぬ中であつたさうです。

然るに敵はこれを見ると、東は新立屯、西は首山堡、北は方家屯と、三方から砲彈を浴びせかけましたから、心は鐵の如くでも、身は元より石ではありませんから、見る見る中に味方の兵は、算を亂して斃れました。

するとまた此機に乘じて、一旦退げた敵兵が、また逆襲して來ましたので、此所でまた白兵戰に成り、少佐自ら軍刀を揮つて、群がる敵に割つて入り、瞬く中に三四人を、見事に斬つて棄てました。けれども先刻からの砲擊の爲めに、重傷を數ヶ所に帶びて居ますので、今は是までと覺悟をして、其場に切腹しやうとしたのを、部下の者に助けられ、漸う山の下まで退きましたが、遂に此所で事切れてしまひました。

かう云ふ風で、この首山堡の攻擊は、我が勇猛なる第二軍にも、思ひの外面倒でした。

そこで午後六時半頃には、我が各縱隊の砲兵が、又一齊に砲口を揃へて、地軸も碎けよと云ふ勢で、猛烈に彈丸を喰はせましたが、それでもまだ敵は動かず、果は此日も苦戰の儘で、また暮れてしまふ事に成りました。

が、此時はもう敵も味方も、近い所は五十米突まで接近して、互ひに一歩も退かず、隙を覗つて居りましたが、其中に機も熟したと見えまして、九月一日の午前一時、大夜襲の命は下だりました。

然るに今度の大夜襲は、果して効を奏しまして、午前二時半までの突擊に、頑固の敵も力弱つて、とう〳〵後を見せましたから、是を蹴散らし、突落して、九十九米突の高地と云ふ、首山堡の絶頂に、

日章旗を押し立てゝ、ドッと勝鬨を揚げましたのは、何と愉快な事でありましたらう。

思へばこの首山堡は、三十日の夜明から、九月一日の夜明まで、殆んど五十時間に亙る大激戰で、漸く占領したのであります。

第十二章　遼陽城の日章旗

頑固なる首山堡の敵は、我が百折不撓の勇氣に依て、遂に首尾よく追拂ひ、遼陽の關門なる要害の地は、斯くして我が軍の手に歸しました。

其所で我軍は、此の陣地を占めますと、まづ一時兵力を養ひ、更に九月二日を以つて、三軍互ひに連絡を取りつゝ、いよ〳〵遼陽の總攻擊に掛りましたが、此時左翼軍は、右縱隊を八里莊から、左縱隊を大趙家臺から、又中央縱隊は、鐵道線路を挾んで、西八里莊、尤

家莊子から進めて、遼陽城へと迫つたのであります。

けれども此日は、只遠方から砲彈のみを交換して、激い戰爭にも成りませんでしたが、その砲の中には、此間中の接戰で、敵から鹵獲した重砲を、その儘味方の用にして、敵を大いに窘めたのは、小氣味の好い話ではありませんか。

明くれば九月三日、午前十一時と云ふのを合圖に、いよ〳〵歩兵の全力を擧げて、總攻擊に掛りますと、敵も流石に城廓に據り、またその前の防禦物を力に、一時は抵抗を試みましたが、元より長くは支へ得ませんく、やがて停車場に火を放ち、これに紛れて退却を初めましたから、此方はさらに勝に乘つて、逃げる敵は砲彈で擊ち斃し、殘る敵は銃劍で突き伏せ、息も次がせず追擊し、遂に四日の午前には、天地に輝く日章旗を、遼陽城の一角に押し立て、是と同時に三軍が、三方から練り込んで、一度に萬歲を唱へました。

するとまた、今まで此城内に居て、露兵の爲めに窘められて居た住民は、我が軍の乘り込んで來るのを見て、爭つて日章旗を立て、皆その下に立ち列んで、我が軍を歡迎しましたが、その日の市中の賑ひは、まるで正月か大祭日の如く、是が昨日までの戰場とは、容易に思はれない位でした。

あゝ遼陽の敵の根據地は、遂に我軍の有に成りました。昨日までは敵帥クロパトキンの、得意に成つて構へて居た本營は、其儘我が總司令官、大山元帥を迎へる事に成つたのであります。

蓋し滿洲軍總司令官として、大山元帥が戰地に臨んだのは、過ぐる八月の事でありましたが、此の遼陽の大攻擊は、總司令官出陣以來、實に初度の大戰で、而も此通りの大勝利を得ました。是と云ふのも元帥初め、帷幕の將軍の作戰計畫が、その宜しきを得たればこそです。

それと共に、我が帝國臣民の、決して忘れては成らぬのは、陸軍歩兵大尉として、梨本宮守正王殿下の、奥軍の司令部附として、親しく此の大戰に與り賜ひ、屢々砲煙彈雨の下に、危險を冒かさせ給ふた事であります。

さても遼陽を追はれた敵は、此時何所へ行きましたらう？　彼等は更に北の方、奉天府さして退いたのです。されば我が黑木軍は、此時わざと遼陽に入らず、退く敵を追ひながら、煙臺から沙河の方面まで、その大部隊を進めました。次いで起るべき大戰は、是非此の邊で無ければ成りません。

第十編　沙河の巻

第一章　敵軍の南下

我が滿洲軍が、見事遼陽を占領してから、滿一ヶ月を經た後に、敵將クロパトキンは、新手の大軍を率ひまして、珍らしくも攻勢を取り、我軍と沙河に會して、此所に大戰を開きました。

一體今までの戰爭は、多く我軍のみが攻勢を取り、鐵條網や鹿柴や、狼窪や塹濠やで、嚴重に固めた敵の陣地を、此方から打破るのが常でありましたが、今度ばかりは敵も攻勢を取り、味方もこれに向つて戰つたのですから、そこで又この戰爭を、沙河の會戰と名付けるのであります。

然し敵軍が、何の爲めに此時は、斯く攻勢を取つて來たかと云ひ

ますに、それには二つの理由がありました。一つは、彼の旅順の兵が、日本の猛烈な攻擊を受けながら、まだ踏み耐へて居りますから、流石に思ひ切る事が出來ず、何うかしてこれを助けたいと云ふ未練と、又一つには、遼陽で破れた後、本國から送られた大兵が、新たに到着しましたので、再び元氣が付いた故であります。

されば總大將クロパトキンも、その部下に與へた訓令の中に、

『我皇帝は本官に與ふるに、敵に對して充分勝利を得しむるに足るの兵力を以てせり。』

と、斯う云つた位でありました。

これを思へば、今まで敵の破れたのは、皆兵力の足りなかつた故でせうか。否、戰の勝敗は、決して兵の多寡には因りません。兵力よりも武器よりも、軍の士氣と云ふものが、更に大切なのであります。而も敵將は其點に心付かず、只兵數の殖ゑたのを賴みに、なま

じ攻勢を取らうとしたのは、何と云ふ迂濶な事でありませう。

尤もクロパトキンは、露國でも有名な戰略家であります。されば如何に血迷うても、此場合に只兵力斗りでは、勝を得られるものでは無いと云ふ事を、必ずしも知らぬ事はありますまい。それに強いて部下を勵まして、心ならずも南下の策を取つたのは、實は氣の毒な所もあるのです。蓋し彼の本國では、まだ我日本軍の、かくまで勇猛である事を知らず。何でも兵力さへ增してやれば、遼陽を取り返へすは無論の事、遠く旅順の急を救ふのも、決して難くは無いと思つて居たので、さてこそ此のクロパトキンに、南下の命を傳へたのであります。

第二章　大會戰前の小衝突

いよ〳〵南下と決心したクロパトキンは、遼陽を追はれてから、一旦兵力を養つて居た、奉天附近の陣地を出て、我軍を攻めに掛りましたが、中にも我右翼軍、卽ち黑木大將の第二軍は、初めから彼を最も窘めて、一番の强敵と思はれて居ましたので、まづ此方面に向つて、最も優勢の兵を當らせました。

卽ち本溪湖の方面には、二箇師團の步兵に、砲數凡そ八十門、三家子から八家子に亙る線には、凡そ四箇師團を繰り出し、更に三箇師團を率ゐて、クロパトキン自ら其後に扣へました。これに反して中央軍と左翼軍とには、各二箇師團を以て當らせたのです。

これを見ると敵軍は、まづ我右翼軍から破つて、側面から遼陽を攻擊し、一擧に取り返へさうと云ふ計畫でありました。

されば又我軍は、早くも此樣子を見て、本溪湖縱隊と右翼軍の右縱隊とを以て、專ら敵の主力を抑へながら、その正面からは、右翼軍の主力と、中央軍の右縱隊とが向ひ、又左翼軍は、その全力

を擧げて、鐵道線路の西側の敵を拂ひ、驀地に沙河堡附近まで進んで、敵の主力の後へ廻はり、その退路を遮らうとしたのです。

双方此の手配を以て、彼の大會戰の初まつたのは、十月初旬でありましたが、尤もその前の小衝突は、九月の中旬から度々起つて、その十七日には、本溪湖の北七里の、平臺子と云ふ所で、凡そ三時間斗り激戰がありました。

此時は歩兵七箇中隊、砲兵二箇中隊を以て、我が一大隊を攻擊して來たのですが、我が砲兵は、敵に非常の損害を與へて、遂に擊退したのでありあます。

また二十日には、城廠附近に居た我が兵が、大嶺及三龍峪の敵を攻擊し、これも北方へ擊退しました。

其他二十五日から二十七日頃まで、我が前衞と、敵の前衞とは、此所彼所で衝突しましたが、三十日の午後には、敵の騎兵が五十騎

斗り現はれて、長灘にある支那船十七隻に、石油をかけて燒き棄てました。長灘とは、遼陽と新民廳との間にある、渾河の渡船場の一で、常から船の澤山ある處ですが、敵は是等の船の中に、我軍の彈藥や糧食があると思つて、かう云ふ亂暴をしたものでせう。

かうして小衝突をして居る間に、十月の初と成りますと、双方まで〳〵近く迫つて、戰機も十分熟して來ましたが、やがて八日の夜に成りまして、敵は本溪湖方面から、遂に我軍の前面に現はれ、太子河の左側に移つて、我が左側へ迂廻し、すつかり包圍して攻め掛りました。

第三章　本溪湖隊の苦戰

さても敵の大軍は、疾風迅雷の勢を以て、我本溪湖枝隊の前面に激しく襲ひ掛つて來ましたが、本溪湖には一箇軍團、大嶺には一箇

師團、また土門子嶺にも一箇師團と、それ〴〵優勢の兵を以て、三面から向つて來たのです。

此時本溪湖には、平田少佐の一隊が、守備に當つて居りましたが、此大敵を引うけましては、如何なる勇將猛卒も、長く支へる事出來ず、遂に少佐は負傷し、陣地の前の兜山は、敵の手に取られてしまひました。

すると、此所より大嶺に通ずる、岩山の高地まで、間もなく奪はれてしまひましたから、その爲めに、諸隊の聯絡が絶えたのであります。

是より先き、右縱隊の島村少將は、本溪湖方面の急を聞きまして、九日の夜更には、此邊まで進んで來ましたが、此時はもう岩山は、敵の手に歸して居りました。

然るに此地は、此邊で一番高い所ですから、此所を敵に取られて居ては、非常に不利益だと云ふので、何でも取り返へさねば成らぬ事に成りました。

丁度其時は、夜もまだ明けないで、霧が深く降つて居ましたから味方はこれを利用して、敵を強襲する事に決し、卽ち今村隊の第三中隊が、まづこの大役に當つたのであります。

そこで第三中隊は、足場の極めて惡い所を、無二無三に進みまして、岩山の敵に向つて行きますと、先に此所を破られて、恨を呑んで一旦退却した、梅澤枝隊の一箇中隊が、同じく逆襲に來合はせましたから、卽ち是と力を合はせ、山を拔く勢を以て、敵の陣地に突擊し、午前十時頃には、首尾よく占領してしまひました。

すると又敵の方でも、一度は擊退されましても、元より新手が大勢居りますから、何とかして今一度、此處を奪ひ返さうと云ふので、更に砲兵の力を借り、勢鋭く攻めて來ました。

其中に霧が晴れましたから、初めて敵の陣地を見渡しますと、近くは一箇聯隊程に過ぎませんが、遙か後の威寧營から、西溝附近へかけての敵は、さながら雲霞の如くに、其數幾萬とも知れませんので、なまじ此方から討て出るより、此所を堅固に守るに如かずと、中川少佐の一隊に次で、平田隊も亦此所へ馳けつけ、共に守備の任に當りました。

そこでまた島村少將は、太子河の左岸から、我が右翼を衝かうとする、敵の一隊をまづ破つて、他の諸隊との聯絡を取らうと思ひ、今村大佐に後を頼んで、自分は遠藤少佐を伴ひ、對岸の敵を突擊に掛りました。

これと同時に我が砲兵隊は、太子河の右岸から、猛烈な砲火を浴びせましたので、敵は一溜りも溜らず、狼狽へながら逃げてしまひました。是は十一日の事であつたのです。

然るにその午前十一時頃、敵の優勢なる砲兵は、太子河右岸の所所に現はれ、我が各陣地に向つて、一度に射擊を初め、又その間から潮の如き大兵が、凄まじい勢で攻め寄せて來ました。

此時我が岩山には、志波、本多、不破、中川、平田の四少佐が、各一箇大隊に過ぎぬ兵を以て、陣地を占めて居りましたが、敵はその各方面に、それ〴〵四五倍の多數を以て、一擧に乘取らうと掛つて來たのです。

されば我が諸隊は、必死に成つて防ぎ戰ひ、幾度と無く突貫して來る敵を、其都度擊退して居りましたが、その爲めに志波隊の第十一中隊は、兵員三分の二を失つて、酒保人夫の如き者まで、義勇兵に成て線戰に加はり、中にも或る上等兵などは、その銃を破壞されて、死んだ戰友の銃を拾ひ、又破られて又拾ひ、都合五度まで取り替へたと云ひます。其戰鬪の激しさも、思ひやられるではありませ

んか。

又本多。不破の兩隊は、兜山の敵兵から、すつかり見下されますので、一層の苦戰に陷りましたが、幸ひに池田砲兵隊が、苦境に立つて少しも屈せず、よく砲火を飛ばせまして、敵を惱ませましたので、僅に支へる事が出來ました。

けれども此儘の陣地では、如何にも不利益でありますから、何とかして防禦物を築き、これに依て堅固に守らうと云ふので、大膽な工兵隊は、夜に紛れて敵前に出で、大急ぎて工事に掛りました。

所へまた敵兵が、どつと押寄て來ましたから、工兵隊は銃劍を取る間も無く、仕事に使つた鋤鍬を以て、群る敵と渡り合ひ、辛くもこれを擊退しましたが、その時隊長小出大尉は、敵彈の爲めに戰場に倒れ、其他八十餘名の勇士も、同じ枕に戰死を遂げました。

第四章　軍旗山の奮鬪

斯る苦戰の間に、我が勇敢なる守備兵は、よく陣地を守りまして十二日まで踏み耐へましたが、死んで石にかぶり付いても、一歩も此處を退くまいと云ふ、日本兵の强硬なのには、流石の大敵も舌を卷いて、やゝ攻めあぐんで見えました。

處へ木越少將の部下の一隊が、援兵として此處へ走せつけましたから、味方は大いに力を得、茲に陣地の占領は、いよ〳〵確實に成つたのであります。

處がこの本溪湖と同じく、大嶺に居た我が守備兵も、此時分少からぬ苦戰をしました。

この大嶺の守備線には、先に遼陽の戰の時、鎌刀灣から進んで來た、梅澤枝隊が來て居たのでありますが、敵は此方面に、一箇師團

の全力と、多數の野砲とを以て向つて來たのです。

で、七日頃から幾度も小衝突を行つた揚句、十一日に至りまして、例の猛烈な砲擊に次いで、優勢の夜襲を試みましたので、殘念ながら衆寡敵せず、一旦は大切の高地を棄てゝ、退却せねば成りませんでした。

けれども此所を取られては、本溪湖と土門子嶺との間は、全く連絡が切れてしまいますから、如何なる苦戰を續けても、是非取り返へさねば置かぬと云ふので、剛勇なる平田大佐は、まづ部下の士卒を集め、

『生きて陣地を奪はれて、人に笑はれても厭はぬ者は、勝手に何處へでも去れ！　邦家の爲めに盡忠の士と成らうと思ふなら、乃公と一處に來て戰へ！』

と、言葉鋭く云ひ渡しましたが、この隊長の一言には、一隊の將校

士卒は、肉の震ふまで勵まされ、此處を去る者は元より無く、皆必死の覺悟を極めて、いよ〳〵逆襲と云ふ事に成りました。

で、此決死の勇兵が、間も無く山上へ突擊しますと、敵も兼て待ち構へて居ましたから、寄手を眼下に見下だしながら、一齊に射擊を浴びせます。その勢の凄まじさ！　その爲めに斃れる者數知れず。遂には平田大佐も傷き、その副官は戰死し、旗手も亦擊たれまして、果は僅に上等兵が、隊旗を捧持して進むと云ふ有樣です。

また別働隊として同じく攻め登つた、鏡山大尉の中隊も、散々に擊ち惱まされ、大尉は爲めに戰死し、代つて指揮を取つた秀島中尉まで、同じ枕に斃れました。

かう云ふ有樣で、折角の我が逆襲も、容易に其功を奏し兼ねて居りましたが、恰も好し我が砲兵隊は、遙に其急を見て、暫時も猶豫せず、山上の敵を目がけて、劇しく榴散彈を喰はせましたから、流

石に頑固な敵兵も、是には大いに度を失ひ、俄に色めいて見えました。

處を我兵は早くも見て、この機失ふ可らずと、隊旗を捧げた一兵が、眞先に進んで登りますと、それに非常な勇氣を得て、全隊が一度に突貫を試み、茲に兩軍入り亂れて、劇しい格闘を行つた揚句、とう〳〵敵を小氣味好くも、この山上から追ひ落して、首尾好く陣地を取り返へしましたが、かゝる少數の兵を以て、我に倍する大敵の、而も山上に居る者を、かく見事に撃退したのも、全く眞先に進んで行つた、軍旗の威德によると云ふので、此時から此山を、新たに軍旗山と名づけました。

第五章　閑院宮殿下の御偉勳

茲に又土門子嶺は、我が第一軍右縦隊の、最も左翼に當る陣地で

梅澤隊の二箇中隊が、兼てから此處に構へ、更に椙原隊も加つて、共に守備を固めて居たのであります。

然るに此地は、岩と岩と重り合つた、如何にも嶮岨な陣地ですから、敵も普通の歩兵戰では、到底思ふ樣に取れないと見て取り、速射野砲二十四門に、臼砲四門と云ふ優勢な武器で、夜が明けてから日の暮れるまで、殆んど休みなく攻撃し、更にその力を借りて、歩兵の一部隊が、岩を傳ひ、石を這ひながら、突貫を試みること前後四五度、その勇氣はなか〳〵感心なものでした。

そこで我兵も、また猛烈なる射撃を浴びせかけ、寄せ來る敵を窘めましたが、敵は尙これにも恐れず、屍を踏み越え踏み越えして、遂には我陣地の一角に、小癪にも躍り込んで來ましたから、此所に又もや搦闘戰が始まり、銃を振るやら、石を投げるやら、又爆烈彈を撃ち込むやら　入り亂れて揉み合ひましたが、これもやがて撃退

されてしまひました。

けれども味方は小數ですから、此方から討つて出る事は出來ず、只砲彈を浴び、突擊に當りながら、辛くも踏み耐へて居る斗りです。

かう云ふ風で、我が右翼軍は、何の方面も皆大敵を引受け、非常の難戰をしながら、決して之が爲めに退かず、よく防ぎ戰つて居りましたが、何分にも地理が惡さに、諸隊の間を初め、司令部との連絡も、十分取る事が出來ませんでした。

されば司令部に於ても、一方ならず心を痛め、果は非常の危險を冒して、更にその陣地を進め、以つて全軍を勵ました位です。

彼の小原參謀長が、名譽の負傷をしたのも此時で、參謀長は自ら馬を躍らせ、各地の戰況を見廻ります中に、敵彈に中つたのでありますが、その他雨の如き砲彈は、遠慮無く司令部の近所に落ちて、爲めに傷ついた者も少くありません。

その中に、本溪湖、大嶺方面の敵も、我が强硬な鋒先には當りかねて、それ〴〵後へ退きましたので、一番ひつこく攻擊に來て居た、土門子嶺方面の敵兵も、十三日の午後に至つて、遂に退却を始めました。

所へ又聞えましたのは、實に愉快な報告であります。それは他でもありません。兼て獨立騎兵旅團の長として、第一軍と共に行動して居らしつた、陸軍少將閑院宮載仁親王殿下が、橋頭の邊から躍り出で給ひ、さながら颶風の砂を捲く如く、凄まじい勢を以て、慕地に敵の右側に迫り、機關砲でまづ荒肝を挫いで、逃げる所をまた蹄に掛け、縱橫無盡に踏み蹂りながら、此邊まで前進して、諸隊と連絡を取らせられた事です。

實に此時の殿下の御働きは、味方に非常な利益を與へまして、此爲めに士氣の振ひました事は、また一通りではありませんでした。

之に反して敵軍は、いよ〳〵戰の不利なのを見て、又た例の退却を初め、太子河の支流を亂だして、北の方へと走る所は、まるで汐の退く有樣ですから、我軍は勝に乘つて一齊に追擊に掛り、頭を抱へて逃げて行く後から、砲火をどつと降らせましたので、敵は此爲めに散々な目に會ひ、戰場に棄てた儘の死骸は、見る〳〵二千斗りに上つたのであります。

第六章　右翼軍の左縱隊

さて又同じ右翼軍の中でも、左縱隊として向ひましたのは、松永(正敏)岡崎(生三)兩少將の隊で、松永隊は右翼に、岡崎隊は左翼に、互いに連絡を取りながら、十二日の朝までには、三城子山の南方から拉子山の附近まで占領し、更に前進攻擊にかゝつたのです。

尤も三城子の攻擊は、右翼隊の隨分苦戰した戰爭でした。是と云

ふのも、敵は高地に陣を占め、味方は平地からこれに攻めにかゝるのですから、何うしても銃火を多く受けて、その麓まで取りつくのさへ、容易な仕事ではありません。

それにまた山に掛ると、岩石の凹凸した上に、小さな谷が幾つにも割れて居て、それを攀ぢ登る困難さは、また一通りでありませんから、急にはこれを乘取る事出來ず、果はその日も暮れてしまひました。

そこで我隊は、遂に夜襲と決心し、敵前二三十米突まで忍んで行つて、俄かに突擊を試みましたが、敵も必死に爲つて防ぎましたから、忽ち猛烈な白兵戰と成り、双方入り亂れて、奮擊突進します中に、午前三時半頃に成ると、敵も遂に崩れ出して、下柳河の方へと逃げ出しました。

勝に乘つた我軍は、更に敵を追擊して、難無く燒達勾まで占領し

たのであります。

此時左翼の岡崎隊は、十一日を以て泊嶺子を發しましたが、見れば優勢な敵の騎兵は、三城子山の北麓に現はれ、また三家子、三塊石山の近所には、砲兵歩兵の大部隊があつて、半拉子山に進んで居る、我が一部隊に向つて、猛烈な攻撃を試みましたから、岡崎少將は、自ら小高い岡に登つて、彈の來る前を事ともせず、平氣で双眼鏡を取つて、頻りに戰況を見て居りました。これは左翼の松永少將が、三城子山を占領するのを待つて、下燒達勾の西の方へ、隊を進めやうと思つたからです。

然るに午後一時頃に成ると、敵はこの左翼隊に向つて、更に激しく射撃を喰はせましたから、今は猶豫する處で無いと、隊は猛然として前進を始め、その彈の雨と降る下を、半拉子山の西の方なる、石山さして突撃しました。

されば敵も、砲兵の全力を注いで、我が隊の突撃を遮らうとしましたが、何を小癪なと、味方の砲はまた之に向つて、用捨無く爆裂彈を浴せて、散々に撃ち惱ましましたので、この爲めに石山の敵兵も、その掩護を失つて、やゝ揺動めいて見えましたから、此機に乘じて我軍は、一度にどつと突撃し、遂に此處を占領してしまひますと、敵は隊伍を亂しながら、寺山の方へと引揚げました。寺山には關羽が祀つてあります。關羽もこの樣子を見たら、苦い顔をして笑いましたらう。

さて岡崎隊は、已に石山の敵を追ひ、三家子附近まで進みましたが、此時はまだ松永隊が、十分進んで居りませんでしたから、岡崎隊は孤立の姿で在りました。

けれども大膽なる岡崎將軍は、更らに躊躇ふ色も無く、前面の大敵に向つて、直ちに戰を挑み、初めは激しい砲戰を行ひましたが、

其中に寺山の敵陣を目指して、孤家子の南の端から、猛烈な突擊に掛りますと、上柳河や小堡の敵砲は、猛烈に砲火を飛ばし、また下燒達勾の步兵からも、激しい側面射擊を試みて、寺山の掩護にかゝりましたから、この爲めには我兵も、少からぬ損害を受け、高木、宮川の兩少佐も、遂に重傷を受けて倒れた位でしたが、その日も漸く暮れる頃、遂に奪略してしまつたのです。

其處で次の十二日には、いよ〳〵楊城塞を攻擊する事に成りました。

第七章　旅團感狀の嚆矢

此の楊城塞と云ふのは、敵も要害を賴んで居た所で、その東南には、角堡山と云ふ要地もあり、非常に堅固な陣地であります。

この要害に向つたのは、仁平少佐の一隊でありましたが、何しろ敵は高地を占め、また散兵壕に據つて、我を眼下に射擊しますので、いくら猛烈に襲ひかゝつても、一向效の無い斗りか、却つて非常な苦戰に陷つて、討たれる者數知れず、如何にも危い有樣に成りました。

けれども隊長仁平少佐は、死んでも此所を取らずば置かぬと、劍を振り立て、眞先に進んで、頻りに部下を勵ましました。その働の勇ましさは、彼の首山堡の激戰に於ける、軍神橘中佐にも、決して劣らぬ位でありましたが、その中一發の銃丸が、ヒユーと斗りに宙を切つて、少佐の胸板を貫きましたから、流石剛氣の仁平少佐も、『殘念！』の一聲を名殘にして、其場に名譽の戰死を遂げました。

是より先黑木司令官は、後方寺山の陣地から、遙に仁平大隊の働を見て、深くその勇壯を賞し、手ばやく白紙を取りよせて、鉛筆で感狀を認め、傳騎を飛ばして届けさせましたが、その時はもう仁平

少佐は、已に戰死した後であつたのは、實に殘念な事でした。

さて仁平の戰死の後は、星野大尉代つて指揮を取り、別に矢野大尉も、これが應援に加つて、更に勇戰奮鬪を試みましたが、何しろこの角堡山は、楊城塞隨一の要地であるから、敵は死んでも放さぬと云ふ氣で、有らん限りの力を振ひ、我が攻擊を防ぎますので、此爲めに又矢野大尉も、壯烈な最後を遂げるに至りました。

矢野大尉に代つたのは、齋藤中尉でありましたが、その一小隊を指揮して居た、大崎少尉と云ふ若武者は、もどかしく思つたか、『突貫前へ！』の號令と共に、無二無三に敵壘に迫り、一隊の士卒が一團と成つて、今や躍り込まうとする時、無殘やこの大崎少尉も、敵彈をその胸元に受けて、其場に斃れてしまつたのであります。

けれども味方はこれに勵まされて、非常な勇氣を得まして、一度に敵を襲ひかゝりましたが、中にも谷山大佐の如きは、兼て信任して居た仁平少佐初め、有爲の少壯士官まで、かく續いて戰死しましたのに、烈火の如く憤激し、『おのれ露助奴微塵にして、この仇を取らねばおかんぞ。』と、鬼大佐の本性を現はし、怒濤の岩を碎く勢で山上へどつと押し寄せ、遂に敵兵を追ひ散らして、此所に萬歲を唱へましたのは、午後六時半頃でありました。が、此時調べて見ましたら、その隊の兵數は、殆んど四分の一に成つて居ました。その戰爭の凄まじさも、實に想ひやられるのであります。

さて角堡山の敵壘も、かくて我軍の手に歸しましたが、實にこの功績は、黑木軍の攻擊前進に、大なる利益を與へたものですから、さてこそ大山總司令官は、この岡崎部隊全體に對して、直ちに感狀を與へました。その本文によりますと、

岡崎少將の令下にありて明治卅七年五月一日鴨綠江附近の開戰以來、摩天嶺及黑英臺の諸戰に於て、常に勇敢なる戰鬪を爲し、

又遼陽北方の會戰に於ては、平坦開濶の地を直進し、猛烈果敢の攻撃を以て、敵陣の鎖鑰地たる、楊城塞の高地を奪取し、以て軍の攻撃前進を容易ならしめたり。本職は茲に其武勇を賛賞す。

と云ふのであります。

今まで一個人や一部隊に、感状の與へられた例は、決して少くはありませんが、而も總司令官の名を以て、かうして少將の部下全體即ち旅團全員に向つて、特に感状の渡つたのは、實にこの岡崎隊が、その嚆矢なのであります。

第八章　三塊石山の大夜襲

さてまた中央軍は、例の野津大將の率る所でありますが、左右兩翼軍との連絡を守る爲め、暫時樣子を覗つて居りますと、其中に敵の大軍は、渾河を渡つて攻め寄せて來ましたから、其所で十月九日の夜には、愈々攻勢を取りまして、拒子山の南の高地を初め、更に進んで双龍寺南方高地から、文門子東方高地に至る線を、確に占領してしまつたのです。

然るに右翼の黑木軍は、非常に優勢な敵を受けて、まだ攻勢に轉ずる事が出來ず、困難の地に立つて居りますので、勢ひ中央軍の右縱隊は、その強敵の側背に迫り、右翼軍の急を救はねば成りません。

それに付いて、まづ第一に邪魔に成るのは、三塊石山に構へて居る、優勢の敵兵であります。

この三塊石山とは、平地の中に凸起した山で、その絶頂には、まるで柱を立てた樣な、天然の大石が、三本並んで立つて居る、奇體な山でありますが、敵はこの險阻の地に、アレキサンドル第三世名譽聯隊と云ふ、世界に名高い勇猛な兵を、特に備へて置いたのです

から、これを攻め落すと云ふ事は、實に容易な事ではありません。

されば我が丸井少將(政亞)は、右翼軍の岡崎少將(生三)と力を合せながら、左右から攻め寄せて、前面の敵を掃ひ、"三家子附近を占領して、やがて山麓近く迫りました。

此時右翼隊長川村中將は、いよ〳〵今夜を以て大夜襲を行ひ、是非共此三塊石山を、夜明までに奪ひ取る事に決し、急いでその手配をしました。

その手配によりますと、丸井少將はその部下を以て、東方の双子山に向ひ、鎌田大佐はその部下を率ゐて、直ちに三塊石山に突擊する事、夜の一時を以て、烽火を一發揚げるを合圖に、各隊一齊に運動する事、また暗夜の混戰には、よく同士討が初まる故、それを防ぐ爲めには、豫め合言葉を極め、一方から『つゆ!』と問へば、一方からは『ひ!』と答へ、それで敵味方を見分ける事と、それ〴〵十分

に用意をして、愈々夜襲を決行する事に成つたのです。

で、何れも今夜の大夜襲こそ、何でも敵を蹴落して、日本軍の强さの程を、世界に示さなければ成らぬと云ふので、勢ひ込んで居ります所に、時は十月十二日、午前一時と覺しき頃、玉門子北方の山上に當つて、一發の烽火の光が、闇を劈いて見えましたから、それッと云うと各隊は、一度にどつと押し出しました。

その中二時頃に成りますと、忽ち急擊な銃聲が聞えて、まづ左翼隊の方面から衝突が初まり、續いて右翼隊の方面にも、激しい戰鬪が初まりました。所が何分暗夜の事で、動もすると諸隊の連絡を失ひ、其爲めに苦戰に陷つた者もありますが、更に屈せぬ勇將猛卒はやがて敵の第一線に迫まり、勢鋭く攻めかけたのです。

すると敵は、山上から釣瓶擊に擊ち下ろす斗りか、麓にある七八の民家を、其儘防禦物に取りまして、此處から盛んに彈を飛ばせ、

此處を先途と防ぎますので、見る〳〵中に我兵は、少からぬ損害を受けました。

けれども痿まず進みます中、味方は追々に新手を加へて、やがてこの三塊石山を、三方から押し包み、喚き叫んで攻め掛けますので茲に双方入り亂れ、奮擊突戰に時を移しましたが、此時丸井少將は敵彈に中つて傷き、また安村大佐の如きは、今や敵壘に達せんとする時、腋腹を擊ち貫かれて、壯烈な最期を遂げました。

また旗手品川少尉は、敵彈に頭腦を射貫かれながら、尙大切の軍旗を放さず、代つて旗手と成つた山脇少尉も、同じく頭部に彈を受けて斃れ、遂には副官前川大尉が、暫く軍旗を捧持したと云ふ、大混亂を極めたのであります。

其他敵兵數名を斬て、名譽の戰死を遂げた橋本大尉、敵の一將校と渡り合つて、首尾よくこれを仕留めた後、狙擊彈に斃れた黑田大

尉など、世にも目覺ましい働きをした人は、一々擧げるに遑も無い位です。

第九章　中央軍の成功

かくて午前五時半頃には、敵の防禦陣地を、殘らず占領してしまひましたが、村落の家屋に立籠つた敵と、山上に陣取つた兵とは、なか〳〵動く氣色も無く、その上逃げ損じた者共は、此所彼此の物陰から、頻りに狙擊を仕ますので、まだ決して安心は出來ません。

其所で、石井、岡本、奥田の三大尉は、猛然として先頭に躍り出で、西南の方から山上に突擊し、群る敵の只中へ、劍を閃めかして割つて入り、此所にまた激しい搏鬪を初め、肉は飛び血は迸る、凄まじい有樣に成りましたが、此間に敵のブッフ大尉を、とう〳〵生擒にしてしまひました。

又村落に居る敵に對しては、一人も殘らず討つて取れと云ふので遂に決死隊を組織し、住田大尉その隊長と成つて、ドッと斗りに攻め掛りました。

すると此の敵兵も、負けぬ氣に成つて擊つて出で、一方の血路を開かうとしましたが、我が猛烈な射擊に會つて、またもや家屋の中へ逃げ込んでからは、その壁に銃眼を明け、此所から巧みに狙擊をして、頻りに我軍を窘めました。

此時山上に於ては、聯隊長代理として、此所の守備を引受けて居た、クリンケンベルヒ中佐が、左の腕に負傷して、遂に捕虜に成つて居りましたから、卽ちこの中佐に向ひ、村落内の敵兵に、降服を說かせやうとしたのです。

然るに剛氣なクリンケンベルヒは、是を承知しませんから、今度は他の捕虜を使つて、此所に居る敵兵に向ひ、『降參すれば助けてやるが、尙抵抗するならば、用捨無く火をかけて、一人殘らず燒き殺してしまふ。』と、かう云つて說かせたのです。

所がこれに驚いて、降參して來た者は百名斗り、他の二百餘名は死物狂の勇氣を振つて、尙抵抗する樣子ですから、此上は是非に及ばぬと、住田大尉は決死隊を指揮し、高粱殼と燐寸とを持つて、雨の如く來る敵彈を潛り、村落の中へ躍り込んで、やがてこれへ火を掛けさせました。

すると、丁度風が出て、見る〳〵中に七八軒の民家は、猛火の中に包まれましたから、此所に立て籠つて居た敵兵は、竈の中に落された樣に、一人も殘らず燒け死んでしまひ、これで初めて頑强な敵も、遂に全滅してしまひましたが、その代り我が決死隊も、往く時は八十人餘りあつたのが、或は擊たれ、或は燒かれて、無事に本隊に引返へした者は、僅に五人に成りました。

さて三塊石山の大夜襲は、此通り壯烈を極め、悲慘を極めた揚句遂に我軍の大成功に歸し、豫定通り夜明までには、見事占領してしまひましたが、後でよく調べて見ましたら、戰場に殘つて居る丈でも、敵の死傷は千人餘り、之に對して我が損害は、凡そ七百でありまして、その中五百人迄は、安村大佐の部下であつたのです。

然しその大夜襲は、我に取ては非常に大切な戰で、萬一にもこれを誤れば、忽ち敵の大軍に押し返へされ、如何なる苦境に陥つたか知れないのです。

されば野津大將にも、大いに此事を氣遣つて、司令部の非戰鬪員や、また大切な品々は、皆安全な後の方に退け、自分は幕僚を從へて、親しく戰線に進んで居た位ですが、此の通りの成功に依て、三塊石山一帶の要地を、皆此方に奪ひ取り、之に依て我が各軍は、非常な利益を得るに至りました。

さしも大軍を繰り出して、健氣にも攻勢を取つて來た敵の、やがて退却を初めましたのも、全く此の一敗に依つて、大いに力を落した故でありませう。

第十章　左翼軍の進擊

さて又奥大將の第二軍は、今度も左翼軍として、敵の右翼に當りましたが、前にも云ふ通り、敵は黑木軍を最も恐れ、此方面に兵力を集めて居りましたから、隨つて奥軍の前面には、初は二個師團の敵より居ませんでした。

されば此の左翼軍は、その先鋒を大觀音閣方面まで進ませ、卽ち能美隊の主力に、騎、砲、工の各隊を加へて、混成枝隊を編成し、またその中の下江隊には、内田騎兵隊の一部を援兵とし、最も左翼に進んで居る、秋山少將の騎兵團と、これと互ひに連絡を取りなが

ら、前面の敵を衝く事に成りました。

いよ〳〵進擊に掛りましたのは、十日の朝のことでありましたが、まづ河公堡から出て、凡そ五里斗り進みます間は、別に何の事もありませんでしたが、黃山屯の近邊まで來ますと、彼方に支那服を着け支那馬に乘つた、凡そ二中隊斗りの騎兵が見えますので、さては清國の守備隊かと思ひますと、やがて我軍の近づくのを待つて、ドッと此方へ襲ひ掛つて、一齊射擊を試みましたが、隊長大森少佐は、直ちにこれを迎へ擊つて、忽ちの中に追拂ひ、難無く黃山屯を占領してしまひました。後で敵の死體を檢めて見ましたら、是は赤髯の露西亞兵共が、我軍の眼を眩まさうと思つて、假に支那兵に化けて居たのでした。

然るに此邊を逃げた敵は、青堆子と云ふ村へ入つて、其處の兵と一處に成り、頑固にも亦抵抗をしますから、そこで能美隊は十日の

夜を以て、此陣地に夜襲を試みますと、丁度其時敵兵は、皆油斷して酒などを飲み、夢中に成つて寢て居た處ですから、不意を喰つて大いに狼狽へ、將校は馬を棄て、兵士は銃を拾ふ暇無く、散々に擊ち惱まされて、後の方の油蟲堡へと、蜘蛛の子の樣に逃げて行きました。

青堆子も見事占領しましたから、次の十一日は、油蟲堡、浪子溝方面に對つて、猛烈なる砲擊を加へましたが、敵にも有力な砲兵が居りまして、これに應戰しましたから、此日一日は接戰に至らず、盛んに砲彈を擊換はした斗りで、遂に夜に成つたのであります。

そこで前衞指揮官須永少將(武義)は、能美大佐(成一)と相談して、今夜も亦夜襲を仕やうと、已にその用意に掛つて居ります處へ、健氣にも敵兵が、凡そ二個聯隊斗りをもつて、夜襲に來る樣子ですから味方は急いで手配りを定め、「今にも近く襲ひ掛つて來たら、引包ん

で塵殺にしてやれと、勢込んで待ち構へて居りました。

其中に敵兵は、凡そ百五十米突の處まで、近く進んで來ましたら、それッと云ふので我兵は、一度に急射擊を行ひましたが、元より夜襲を企てる程の敵、なか〳〵これに怯む色無く、皆決死の覺悟を以て、激しく突擊して來ますので、此處に凡そ一時間斗りは、非常な奮鬪激戰に成り、敵も味方もこの爲に、少からぬ損害を受け、能美隊の水郡副官も、これが爲めに戰死した位ですが、遂には敵も力盡きて、後の方へと崩れ立ちましたから、其機を逸せず追擊して、無二無三に踏み散らし、とう〳〵敵の陣地まで、奪ひ取つて了ひました。考へて見るとこの夜襲は、敵から仕掛けて來ながら、却つてこの大敗を招きました。飛んで火に入る譬の通り、油蟲堡と云ふ名も偶然ではありません。

第十一章　須永部隊の奇勝

茲に軍の右縱隊は、中央軍の左縱隊と連繫し、十日には双臺子まで占領し、途中の敵を追ひながら、十一日には大いに進んで、揚家灣の敵陣を奪ひ、また十二日の戰には、十里河の西方で、敵砲五門を奪取しました。

又中央縱隊は、十二日浪子街附近を占領し、大いに敵を破つて、砲十六門を奪ひ、更に進んで追擊中に、又もや四門の砲を取つて、非常な勝利を得ましたが、その以前には、右縱隊も中央縱隊も、正面に優勢な攻擊を受けて、一時は苦境に陷つたのであります。

此時左縱隊は、既に油蟲堡を占領して、此處に主力を置いて居りましたが、見れば敵は、新たに大兵を持つて押寄せて來、而も其砲彈は、照準が確に成つて、頻りに我が陣地に降り掛り、少からず味

方を苦めました。

かう云ふ風で右縦隊は、思ふ樣に進擊する事が出來ず、大いに苦心して居る處へ、又もや軍の司令部からは、『中央及右翼の兩縦隊が正面に大敵を受けて、今苦戰の最中であるから、一刻も速く前面の敵を破り、彼の兩縦隊を救ふ樣に！』と、かう云ふ命令が來ましたから、是に於て重大な任務を負ひ、一層困難な地位に立ちました。

で、元より其職を重んじ、其命を輕んずる、我が忠勇なる士卒はもはや猶豫する場合で無いと、雨霰の如く降る彈丸の下を、道と畑との嫌ひ無く、驀地に突擊しましたが、元より敵は多勢の事ですから、少しもこれに驚かず、笠に掛つて猛烈に射擊し、見る〳〵中に我兵を、二百名餘り斃してしまひました。

此を見て須永少將は、切齒をして悔しがりながらも、『進め！　進め！　進んで死ね！　國家の爲めだ、死んでも退くな！』と、頻り

に部下を勵ましますので、一軍更に奮ひ立ち、味方の死體を乘越え踏越え、脇目もふらず躍り掛つて、敵陣間近く迫りました。恰も好し此方の砲兵隊は、この突擊を掩護する爲め、砲彈を盛んに擊ち込みましたが、その照準誤らず、關帝廟に構へて居た、敵の高等司令部をば、散々に擊ち碎きましたので、流石の敵も是には度を失ひ遂にこの陣地を棄てゝ、綠家臺の北の方から、萬家園子指して退却しましたので、我軍は直ちに進んで、北烟臺を占領したのであります。

此時また左縦隊の左翼は、已に大臺小臺の村落まで進みましたが、敵は又もや大兵を以つて、此方へ押寄せて來る樣子ですから、味方は成るべく是を近づけ、機を見て一時に討つて出やうと、息を凝らして待つて居りますと、敵はまた我軍を、恐れて小く成つて居る事と思ひ、得意に成つて近づいて來ました。

處を十分見すまして『打てッ！』と一時に號令をかけましたら、丁度鍵の手に成つた我が隊は、三方から敵を目がけて、猛烈に一齊射撃を喰はせますと、敵は何と思つたか、まだその大兵を密集させたまゝ、ズン〳〵進んで來ますので、皆我が彈の的に成つて、斃れる者數を知らず、僅か一時間斗りの間に、千餘りの死體を殘して、とう〳〵逃げ出してしまひましたから、此處でこの大臺も、確に占領する事に成りました。

そこで十三日には、永僚堡から萬家園子まで占めて、尙も進擊に掛つて居りましたが、此時彼の秋山騎兵團は、軍の最も左翼を進みます中、渾河の岸の頭臺子、大方臺子の邊で、凡そ二旅團の哥薩克騎兵に出合ひました。

すると敵騎兵は、例の槍を捻りながら、秋山の隊を押し包んで、塵殺にしやうと掛りましたから、直ちにこれを相手にして、暫く鎬を削りましたが、其中に我が砲隊から、用捨無く彈丸を飛ばして、遂にこれをも追拂ひ、秋山隊は勝に乘じて、遂に黑林屯まで進んだのであります。

第十二章　沙河の對陣

さて十四日は、須永少將の部下を以て、林盛堡の敵を討つ事に成りました。

然るに此方面には、又優勢の敵が居りましたので、我が兵の少いのを見ますと、はやこれを侮りまして、まだ攻擊を初めぬ前に、二個大隊の哥薩克騎兵が、猛烈に逆襲して來ましたから、此方は例の急射擊を以て、忽ち二三十騎を倒しましたが、それにも怯まず躍り込んで來る、その騎兵の後には、一個聯隊餘りの步兵が居て、共に激しく突擊して來ますから、味方も大いに奮ひ起つて、安野中隊長

の如きは、自ら軍刀を打ち揮り〳〵、劍術の秘術を盡して、馬を斬り人を薙ぎ、目覺ましい働きをしましたが、流石の哥薩克も舌を捲いて、汚くも後を見せ、歩兵を殘して逃げ出しました。此處を透さず追擊して、どつと林盛堡の敵陣に迫まり、丁度此處まで攻めて來た、中央縱隊と力を合はせて、遂にこれを占領してしまひました。

けれども拉木屯方面には、敵の優勢な砲隊が居て、屢〻我軍を惱のましますので、我が中央左翼の兩縱隊は、この砲力を合併して、一度にこの敵砲隊に向ひ、激烈な射擊を初めたのです。

するとこの砲戰が、やがて雷神の眠まで覺まして、同じ仲間に引き入れましたから、ドーン〳〵の砲聲は、ゴー〳〵と云ふ雷鳴と、一處に成つて天地に轟き、その勢の凄まじさ！　世界も今は碎けるかと斗り。果は篠突く大雨に、敵も味方も包まれて、方角さへ解らぬ位に成りました。

で、其日は勝負もつかず、次の十五日も同じ樣に、朝から晩まで砲戰斗りで、また一日を送りましたが、十六日に成りますと、俄かに敵の砲火が衰へました。これは到底敵はぬと知つて、はや退却を初めた故で、拉木屯も亦我に歸したのであります。

さて左翼軍が攻勢を取つて、遂に此邊まで進んだ間に、右翼軍は又蓮花山の夜襲に、一方ならぬ苦戰をして、十三日にこれを占領し十四日から追擊に移つて、敵を手酷く惱ました揚句、中央左翼と連絡を取つて、遂に沙河堡まで進みましたが、敵もゝはや此時は、鋒を縮めて再び討て出る元氣も見えませんから、茲に我軍は、所謂沙河線なる地を占領し、沙河の流を隔てゝ、敵と相對する事になりました。

所が、此時非常に殘念であつたのは、山田少將(保永)の率ゐる混成部隊が、左翼軍の一部を援けやうと思つて、十六日の夜、魏家樓の

敵を破つて、元の陣地に引揚げやうとする時、一師團斗りの敵兵に不意に包圍されまして、猛烈な襲撃を受けた事であります。されば鵜澤大佐の隊の如きは、非常な苦境に陷りまして、此爲めに大佐は戰死し、其部下の死傷も、實に夥しい事でありました。

又砲兵隊は、先に敵を破つた時、砲二門彈藥車二輛を奪ひながら、此の逆襲にそれを棄てた斗りか、却つて九門の野砲と、五門の山砲とを、共に遺して來ねば成らなくなつた位です。何と殘念な事ではありませんか！

✽沙河の陣✽

さて此度の大會戰は、九月の末から色めいて、十月初に動き出し十六日に至つて、一まづ晩合の體に成りましたが、其間に於て、我が死傷凡一萬六千人、それに對して、敵の損害は、戰死一萬二千に、負傷實に五萬六千斗でありました。

彼から挑んで來た會戰も、又た失敗に歸してしまつたのです。然し、勝敗はまだ何れとも定まらず、互ひに機を覗つて、今一度大戰を行はうと云ふ中に、時候は段々寒く成つて、雪は兩陣を封じ込め氷は敵味方を閉ぢつけて、暫時戰爭も出來ない樣にしてしまひました。

★沙河の卷★

丁度その間に、一方では驚天動地の出來事がありました。これは他でもありません。卽ち旅順の陷落であります。

第十一編　旅順の巻

第一章　旅順の包圍

✽旅順の包圍✽

嗚呼、旅順！　實に此の旅順の名は、我が日本國民の、十年以來、一日も忘れる事が出來ない所でした。

抑もこの旅順は、先に日清戰爭の當時、我が勇猛なる日本軍が、幾多の生命を犧牲にして、これを占領した所であります。

然るに彼の露西亞は、例の三國同盟に依つて、一方我を威して此地を清國に還へさせながら、一方清國を欺いて、まんまと自分の方に取り込み、新たに砲臺を構へ、船渠を据ゑ、莫大な金をこれに注いで、非常に嚴重な防備を整へ、東洋第一の要塞として、大いに得意で居たのであります。

されば我軍も、これを攻め落とすには、實に非常な苦心をしたのでありますが、その正面からは、卽ち東鄕大將が、その艦隊の全力を注ぎ、また背面からは、彼の乃木大將が、第三軍の精英を以て、熱心にこれを攻め立て、開戰以來約一ヶ年、遂に明治卅八年の正月而も二日を以て、見事陷落させてしまひました。

尤も旅順攻擊の前幕は、その背面の第一關とも云ふべき、彼の南山の占領を以て、花々しく開かれましたが、其時專ら戰つたのは、奧大將の指揮をして居た、第二軍であつたのです。

そこで奧大將は、この南山を攻め落とすと、直ちに轡を廻らして、遼陽の方へ向ひましたが、やがて之と入れ代つて、此方面を引受けたのは、驍勇無双の乃木大將で、これが指揮を受けた第三軍は、中將大島久直の率ゐた、金澤の第九師團、同土屋光春の率ゐた、丸龜の第十一師團、及び新たに中將に進んだ、松村務本の第一師團(東京)

と、此三個師團で出來て居りましたが、後には大迫中將(尙敏)の第七師團北海道)、友安少將(治延)竹內少將(正策)等の後備旅團、其他の補充隊が加はりました。

✽ 勸降使 ✽

此乃木軍の奧軍に代つて、初めて金州城に入りましたのは、三十七年の六月上旬でありましたが、丁度其頃海軍では、東側は貔子窩から、西側は金州灣に至るまでを、直接に封鎖してしまひましたから、是に於て旅順の要塞は、海陸兩面共に包圍され、小船一艘、馬一匹だも、容易に脫け出す事は出來なく成りました。

第二章　勸降の軍使

旅順要塞の第一關門と呼ばれた、彼の南山の險は、五月二十六日の一戰で、見事打ち破られてしまひましたが、この南山の陣地から、要塞の本防禦線までは、まだ距離もありますし、またその間には、

★ ★

所々に守備隊が居りますので、此等を順々に打ち破り、彼地此地で幾度か小衝突の後、やがて八月に成りました。

するとその六日の事、敵は水師營の村落を、自ら燒き拂ひましたが、其所からは遠からぬ、八里莊附近の高地を初め、大孤山小孤山に據つて、防備を嚴重にして居りました。中にも大孤山には、砲七八門を以て、我が攻擊準備の作業を、頻りに妨げやうとしますので、何でもこれを擊ち拂へと、やがて七日の夕方から、まづ攻城砲をこれに喰はせ、其機に乘じて、我が左翼隊の土屋中將は、風雨の中を事ともせず、夜半まで突擊して、遂に陣地を半分以上奪ひましたが、敵は尙も頑固に踏み留まり、また鹽廠附近の海面には、軍艦が一隻現はれて、我が側背を砲擊しますので、我は一時進擊を中止し、更にこの軍艦に向つて、盛んに砲彈を飛ばして、遂に港內に追ひ込みそれから日の暮れるのを待つて、更に猛烈な突擊を初め、遂に八日

の夜を以て、首尾好く大孤山を占領し、翌九日の曉方には、小孤山をも手に入れてしまつたのです。

所が其日の午後に成りますと、敵は五六個中隊を以て、大小の兩孤山に逆襲して來、それと同時に、前面の各砲臺を初め、又もや海上に現はれた軍艦から、激しく砲擊を初めましたので、我が陣地は之が爲めに、前後から彈丸を受ける事に成つて、大いに苦戰に陷りのました。かくと見た聯合艦隊は、陸地近く進み寄つて、盛んに應援

✽勸降使軍

をしましたので、夕方までには又敵を追拂ひ、陣地を確に占領してしまひました。

是より先、我が海軍からは、別に陸戰砲隊を組んで、黑井中佐(悌二郎)之が指揮官と爲り、その重砲の効力を現はして、大いに陸兵を助けて居りましたが、その月の初旬から、遙に旅順の市街を初め、軍港目がけて打ち込んだ彈丸は、頻りに敵の肝を奪ひ、七月には市街の一部を燒き拂ひ、九日にはレトウキザンの上に落ちて、非常な損害を與へたのであります。

かう云ふ風に、攻圍軍も次第に敵に迫つて、戰機も十分熟しましたから、是からは彌々全力を擧げて、總攻擊に取り掛る事に成りました。

★旅順の卷

が、此の總攻擊と云ふ事は、最も鋭利な武器を以て、最も猛烈に攻めるのですから、隨つて旅順の市街を荒らし、住民を損ふた事も實に非常な事でした。是れ勢ひ止を得ぬ事でありますが、苟も人情のある者には、決して忍びない所であります。

されば こそ、仁德を備へ、慈悲に富ませ給ふ、わが大元帥陛下は、山縣參謀總長を以つて、大山滿洲軍總司令官まで、難有い御思召をお傳へに成りました。その御思召によりますと、我が大元帥陛下には、旅順口要塞内に居る、戰鬪に與からぬ者共を、成るべく

無事に助けて遣はす様にと云ふ事です。

大山總司令官は、その御思召を承ると、直にこれを乃木司令官に傳へましたから、乃木司令官は、卽ち八月十六日を以て、參謀山岡砲兵少佐を軍使とし、敵の主將ステッセルへ宛てゝ、この御思召を傳へ、又降伏勸告の書を送りました。降伏勸告とは、此上互ひに戰つても、徒らに人を傷ける斗りで、何の役にも立たぬ事である。

✽ 勸降の軍使 ✽

それよりは、どうせ負ける者だから、今の中に素直に降伏して、城を開け渡してしまつた方が、其方の爲めにも利益では無いかと、かう云つて說き勸めたのであります。

其所で山岡少佐は、十六日の午前十時半、水師營の北五百米突の敵の前哨の所へ來て、我が大元帥陛下の思召書、及び乃木司令官の降伏勸告書を、敵の要塞參謀長に渡し、滿二十四時間の中に、必ず返事をする樣に約束して、一旦司令部へ引上げました。

所が、翌十七日の午前十時、今度は敵から軍使が來て、昨日の返事を持つて來ましたが、非戰鬪員を助けて遣るから、豫め他へ逃がす樣にと云ふ、難有い陛下の御思召も、又今の間に降伏しろと云ふ、乃木大將の親切な勸告も、共に御斷り申すと云ふ事です。

★ 旅順の卷 ★

事茲に及んでは、もはや用捨は入りません。是に於て乃木司令官は、全軍に指揮を傳へて、いよ〳〵總攻擊に取り掛りました。

第三章　第一回總攻擊

時は八月十九日、旅順要塞總攻擊の、第一回は遂に開かれました。その陣立はと云ひますと、土屋中將の第十一師團は、左翼隊として大孤山より、松村中將の第一師團は、右翼隊として、百七十四米突の無名山より、また大島中將の第九師團は、中央隊としてそれに聯り、八里庄五家旁の北より、それ〳〵攻擊に掛りましたが、軍司

令官乃木大將は、參謀長伊知地幸介、その他の幕僚と共に、鳳凰山東南の高地に在つて、全軍の指揮を執つたのであります。

そこでまづ最初には、中央隊の右翼を以て、クロパトキン砲臺に強く襲擊を試みましたが、元より堅固な建築の上に、守兵もよく守りましたから、容易にこれを奪ふ事が出來ません。

次いで二十日の夜、中央隊は盤龍山東舊砲臺、左翼隊は東鷄冠山北砲臺に向つて、その前に敵の敷設した、鐵條網をまづ破りに掛りました。

然るにその鐵條網は、今まで南山などに在つたのとは異つて、その鐵條に電氣が掛けてあつて、一寸でもこれに觸れると、直ぐに動けなく成つてしまふと云ふ、恐ろしい危險な物ですから、これを破ると云ふ事も、亦非常な苦心であつたのです。

けれども勇敢なる我が工兵隊は、例の決死隊を組織して、漸くこれを爆發させますと、その機に乘じて歩兵隊は、勢鋭く突貫して、一擧に砲臺を乘取らうとしました。

するとまた砲臺からは、さも待ち構へて居た樣に、機關砲の火蓋を切つて、ドッと火の雨を浴びせかけましたので、殘念ながらこの爲めに、斃される者數も知らず、見る〳〵中に砲臺の下は、味方の死骸で山が出來ました。

それを又事ともせず、躍り越え踏み越えて、左翼隊の一部の如きは、東鷄冠山の北砲臺の、東南凡二百米突程に在る、中間堡壘を奪ひましたが、さうなるとまた砲臺から、猛烈な砲擊を受けますので、折角取つたこの陣地も、亦棄てなければ成りませんでした。

尤も右翼隊の方面では、三里橋西北の高地、及び太平溝東南の高地まで、進んでこれを占領し、尙頑强に守つて居る、水師營南方のステッセル砲臺、並に寺兒溝西北の、海鼠山の敵兵と、睨み合つて

構へる事に成りました。これは二十一日までの事です。

明くれば二十二日の午前、中央隊の小部隊は、工兵隊の力を借りて、首尾よく砲臺の一部を碎き、盤龍山に乘り込みましたが、猶その副廓には、敵兵が殘つて居りまして、石を投げ爆藥を打ちつけ、死物狂に防ぎますので、これを相手に戰つて居りますと、今度はその隣にある、盤龍山西舊砲臺から、我が側面を射撃しまして、大いに苦戰に成りましたが、その日の夕方大島中將の中央隊から、豫備隊中の屈竟の勇士が、二個中隊程猛襲した爲めに、一擧に西舊砲臺を取つてしまひました。

此時土屋中將の左翼隊は、此日の正午を以て、東鷄冠山北砲臺を突撃する心算でありましたが、軍司令官は却つてこれを止め、その代り中央隊の占領した、東舊砲臺を通り越して、望臺及びその西北の高地へ、突撃を試みよと命じました。

で、二十三日には、夕方から運動を始め、左翼中央の兩隊は、盤龍山東舊砲臺を通つて、其近所の敵壘を突撃し、その夜半過ぐる頃望臺の西北の高地を、一度に攻め取らうとしましたが、敵は例の機關砲を以て、激しくこれを射撃しますので、辛くも山の麓に隱れて彈丸を除けねば成らぬ事に成つたのです。

さて右翼隊の方面を見ますと、是は海鼠山の敵と相對したまゝ、まだこれを占領するに至りません。第一回總攻撃の戰況は、斯の如くの有樣で、我兵は非常に傷みましたが、其割に敵を破る事は、まだ殘念ながら出來ませんでした。

第四章　海鼠山の占領

一體旅順の要塞は、初は清國で設けたのでありますが、その砲臺の如きは、十年前の戰爭の時、神勇なる我が日本兵の前には、僅か

一日より支へ得ませんでした。

然るに露國でこれを借り受けて、新たに經營してからと云ふものは、その建築に莫大の費用を掛け、世界で最も新しい式により、最も堅固に造り上げたものですから、これを攻め落すと云ふ事は、先に清國を相手にしたのと、迚も同日の論には成りません。

されば第一回の總攻撃に、我は砲兵と歩兵の力を用ひ、大方は例の突貫の勢で、砲臺占領を企てましたが、その結果は思ふ樣で無く、却つて兵を損じる斗りですから、そこで一旦戰鬪を中止し、第二回總攻撃には、更に正攻法に依る事に成りました。

正攻法とは、まづ工兵の手を以て、敵の砲臺の根まで、稲妻形の路を掘り、この路を傳はつて、敵の足元まで迫つた所で、爆烈藥で砲臺を碎き、其所から初めて歩兵隊が、一度に突貫すると云ふので。要塞を攻撃するのには、是が正式の戰術でありますから、即ち正攻

法と云ふのであります。

またその路を、何故稲妻形に掘るかと云ひますと、これは敵の眼を避け、また彈を防ける爲めなので。これを眞直に掘つて行けば、距離は近く、手數も省ける代りに、忽ち敵の射撃をうけて、とても進む事は出來ません。

で、我攻圍軍は、この正攻法を取る事に成りますと、各方面の工兵隊は、夜を日に次いで路を掘り、凡そ四週間斗りの間に、クロパトキン砲臺へ五六十米突、ステッセル砲臺へは、百米突の所までは漸く出來上りましたから、そこで九月十九日には、第二回の總攻撃に着手しました。

此時松村隊は、例の海鼠山を初め、その傍に聳えて居る、二百三高地に向ひ、大島隊は直ちにクロパトキン砲臺を突き、又土屋隊は之が豫備に廻つて、牽制の運動を取る事に成つたのです。

中にも松村隊は、まづその兵を三手に分け、右翼は二百三高地に中央は海鼠山に、左翼はステッセル砲臺にと、三方から攻め掛りましたが、敵は堅固な砲臺に據つて、頑強に防ぎ戰ひますので、容易に拔く事が出來ません。

其中に中央部隊は、猛烈に攻擊して、海鼠山の東の端の、散兵壕を漸く略取しましたが、日は既に暮れましたから、次の二十日には朝からまた激しく攻め立て、遂にその夕方に及んで、この砲臺を占領してしまひました。この海鼠山は、其頂上に立つと、旅順口の內部が、大方眼の下に見られるので、我が攻圍軍の戰略上、此砲臺の占領は、非常な利益であつたのです。

この海鼠山の占領は、少將山本信行の部隊でありました。されば その勳功は、攻圍軍の中にも最も大なるものでありましたが、其後二十四日の事です、少將は一人の通譯官を隨へ、自らこの山上に登

つて、敵の樣子を視察して居ります所へ、何所から來たか敵の彈が宙を切つて飛んで來て、アハヤと云ふ間に少將の胸を、忽ち射貫いてしまひましたから、流石の勇將もその場に斃れて、遂に戰死を遂げましたのは、實に殘念な事であります。

第五章 『ステツセル』と『クロパトキン』

茲にまた、ステッセル砲臺に向つた、松村隊の左翼部隊は、十九日の夕方を以て、敵の散兵壕まで突進しましたが、猛烈な機關砲の射擊を受けて、一隊の將卒殆んど全滅し、遂に目的を達する事が出來ません。

そこで二十日の曉方には、まづ激しく砲擊を食はせ、敵のやゝ痿む所を、すかさず突貫して行つて、遂に第一壘を拔き、續いて正午頃までには、第三壘まで乘取つて、所謂るステッセル砲臺を、全く

占領してしまひました。

所が此時可笑しかつたのは、敵の逃げて行つた後に、魚形水雷のあつた事です。魚形水雷とは、元より海で使ふべきものです。それを山上に持ち揚げて、陸戰の防備に使はうとは、何と窮した話ではありませんか。

ステツセル砲臺に次いで、我軍の手に落ちたものは、クロパトキン砲臺であります。

是は龍眼の北方にある角面堡で、旅順の命脉とも云ふべき、龍眼の水源地保護の爲め、敵帥クロパトキンが、特に此所に築かせたものであります。

その高さは、僅か六十一米突に過ぎませんが、結構の堅固な事、防備の嚴重な事は、他に類の少い位であります。さればこの方面に向つた、大島中將の中央隊では、先に第一回の總攻擊の時、力を盡

して而も拔く事出來ず、却つて部隊長三原大佐を、その犧牲として失つた位ですから、今度の攻擊には、前以て十分に用意を整へ、手投爆裂彈を持つて居る、特別隊を組織して、砲兵步兵の攻擊の間に機を見て躍り込む手筈にしておきました。

で、十九日もはや暮れる頃、東鄕少佐は一部隊を率ゐて、墓地に外壕まで突入しますと、例の爆裂彈は、手に〳〵爆裂彈を持つて此所から亂れ入りましたが、敵も去る者、同じく爆發藥を投げ出し、また機關砲を打ち出して、大いに我兵を惱まし、其爲めに一旦は退却せねば成らぬ樣に成りました。

實に此時の戰鬪には、工兵隊が最も働いたので、その力で地雷火の途も切れば、また堡壘の一部を破り、用意して行つた土囊を持つて、敵の通路を塞ぎなどして、大いに步兵の突擊を助けたのです。

此夜また伊藤小隊は、水師營の東の方、眼鏡山の前から進んで、

まづ散兵壕を爆發させ、翌二十日の朝に成るまで、激しく戰ひましたから、本郷、小野の兩大隊も、これと共に力を合はせて、猛烈に攻撃し、遂に敵を追つ拂つて、此砲臺を占領しましたのは、午前六時半頃でした。

かくしてステッセル砲臺も、亦クロパトキン砲臺も、共に我手に落ちてしまひました。之が爲めに我兵の損じた事も、亦決して少くは無いので、卽ち此時の戰鬪だけで、右翼隊に三千四百四人、中央隊に千五十人の死傷を出しました。

けれども又考へて見れば、ステッセルと云ひクロパトキンと云ひ共に敵には大切な主將の名です。その主將の名の付いた砲臺を、二つ共奪ひ取つたと云ふのは、何と愉快な吉兆ではありませんか。

第六章　二子山と鉢巻山

海鼠山、ステッセル砲臺を得た、我が松村將軍の右翼は、今や旅順口を眼下に見ながら、直ちに松樹山砲臺と相對し、又クロパトキン砲臺を得た、大島將軍の中央隊は、見事に旅順の水源を奪つて、二龍山の敵と睨み合ふ事に成りました。

茲に左翼の土屋隊は、先の二砲臺の攻撃には、少しも與かりませんでしたが、今や猛烈に運動を初めて、鹽廠の南に聳えて居る、二子山の敵に向つて、やがて襲撃を試みたのであります。

一體この二子山には、大きな砲が備へてあつて、動もすれば我が頭の上へ、猛火を浴びせかけますから、何しても此敵を破つて、陣地を此方へ奪はねば成りません。

そこで機の熟するを待ち、これが攻撃に掛りましたのは、十月四日のことでありましたが、此時聯隊長西山保之は、攻撃に先つて奇襲隊を募り、野口大尉(矩)大谷中尉(清水)小笠原(於菟彦)越智(林藏)の兩少

尉に之が指揮を委ね、小孤山の西南の麓から、夜に紛れて襲撃に掛らせました。

尤もこの奇襲隊は、攻撃隊、砲臺破壞隊、及び牽制隊の三つに別れて、攻撃隊はまづ鹽廠附近に向ひ、他の二隊は海岸から、故らに敵を詐つて、第二高地に迫る風を見せ、其間に攻撃隊は、第一高地に向つたのであります。

戰鬪は夜半から始まつて、而も激烈を極め、其爲めに越智、小笠原の兩少尉も、戰死を遂げてしまひましたが、『一人でも殘つて居る間は、一歩も退く事無かれ！』と云ふ、西山大佐の號令に、士氣は大いに奮ひまして、翌五日には二子山も、我軍の占領する所と成りました。

奇襲隊の功を奏して、二子山は忽ち我が手に歸しましたが、猶我中央隊の前面には、盤龍山西舊砲臺の西南に、鉢巻山と云ふものが

あります。

これも二子山と同じく、其山の形に依て、新たに我軍の付けた名ですが、中央隊のこれが攻撃に着手したのは、十月十六日の事でありました。

爲るに此所を守つて居た兵は、敵ながらも天晴勇猛の士で、鬼神を欺く我が激烈な襲撃に、よく防戰力鬪しまして、容易に此所を明け渡さず、前後四五回の突撃の後、遂に支へきれなく成つて、後の方へ退きましたが、我軍は此の一戰で、鉢巻山は云ふに及ばず、二龍山の中腹から、大鐵道橋に亙る一帶の地を、悉く占領してしまひましたから、此に依て作戰の便利を得た事も、決して少くはありません。

斯くの如く、第二回の總攻撃は、第一回の時に比して、大いに成績が好かつたものですから、引つゞいて第三回の總攻撃は、十月二

十六日に初まりました。

第七章　一戸砲臺の由來

第三回の總攻撃の部署は、軍司令官に依て定められました。

その命令によりますと、右翼隊は松樹山に、中央隊は二龍山及P砲臺に、左翼隊は東鶏冠山北砲臺、及Q砲臺にと、それ〴〵攻撃を始める事に成つたのでした。

是より先、東鶏冠山北砲臺に對する攻路は、十月二十三日を以て大方出來上りましたが、今五十米突で、砲臺の根まで達すると云ふ所で、敵の妨害が激しくなり　思ふ樣に仕事が出來ませんから、今度は地の下に坑を掘り、左翼隊は此所から進み寄る事にしました。

するとまた敵からも、地中を掘つてこれを迎へ、二十六日の夜半頃、爆裂藥をこれに仕掛けて、何も知らずに働いて居る、我が工兵

隊の勇士を、無殘にも撃ち殺しました。けれどもその爆烈の爲めに、大きな穴が出來ましたから、我軍は忽ちこれを利用し、此所から猛烈に突撃する事が出來ました。

また中央隊は、攻撃に掛るが早いか、僅か十分間を以て、二龍山前面の散兵壕を乘取りますと、敵はこれを取り返さうと思つて、二十七日と二十九日とに、二度まで逆襲して來ましたが、難無くこれを追つ拂つて、決して再びは還へしませんでした。

そこで今度は、盤龍山東舊砲臺と、東鶏冠山北砲臺との間にあるB砲臺を撃つ事に成つたのです。

一體B砲臺とは、眞個の名ではありませんが、兼ねて築かれて居る砲臺の外に、今度の戰爭が開かれてから、新たに設けられた砲壘も、亦澤山ありまして、その名が一向解りませんから、それで假に我軍では、A、B、Cの順序に依て、これを呼んで居たのでありま

す。

で、このB砲臺の攻撃は、三十日の午後一時と極まりました。それは例の攻路の工事が、十九日から着手して、二十九日の夕方には、砲臺の下一百米突の所まで、すつかり出來上つて居たからであります。

いよ〳〵突撃と云ふ前には、例の通り工兵の手で、鐵條網を破り壘壁を破りまして、此所から躍り込みました。

その勢の激しさに、敵は二十分程支へた斗りで、我手に明け渡してしまひましたが、一旦痿んで見えた敵は、兼ねて示し合はせたものと見えて、我兵の砲臺に入つた所を、西は望臺、東は鷄冠山、南は舊圍壁の三面から、一度に砲撃を始めまして、我が頭上に彈丸を降らせ、これに惱まされて居る所へ、やがて決死隊とも思はれる部隊が、手に手に爆烈彈を投げながら、猛烈に逆襲して來ましたから、

此方も一生懸命に戰つて、幾度かこれを退けましたが、夜の十時半頃には、更に兵數が增して押し寄せましたので、今や味方も防ぐに途無く、遂に奪ひ還されてしまひました。

此時部隊長一戸少將(兵衛)は、此の味方の不利を聞いて、切齒して口惜しがり、軍刀ヒラリと拔くが早いか、眞先に立つて部下を勵まし、自ら敵兵三四人を斬つて、阿修羅の如く荒れ廻りましたから、これを見た部下の將卒は、頓に勇氣百倍し、一度は棄てやうとした砲臺へ、また激しく突撃しましたので、流石の强敵も度を失ひ、三十一日の夜の明けきらぬ間に、又もや亂れ立つて逃げ出だし、もはや二度と逆襲して來ません。

かくしてP砲臺は、一旦奪ひ還へされましたが、一戸少將の非凡の働きで、見事にまた取り戻しましたから、是より一軍感歎して、その無名のP砲臺を、一戸砲臺と云ふ樣に成りました。

第八章　最後の總攻撃

我軍が正攻法を取つてからは、旅順包圍の作戰も、着々歩を進めて來ましたが、何を云ふにも此の要塞には、敵が有り丈の手段を盡し、出來る丈の力を注いで、必死に守つて居りますから、勇猛無比の日本軍を以てしても、これを碎き破るのは、なか〳〵骨が折れたのであります。

で、思ひの外時間を費やし、旅順の市街はつひ鼻の先に見えながら、そこまでには頑强な砲臺が、まだ澤山ありますので、全く旅順を陷落させる事は、急に出來さうにも無いのです。

然るに敵は、先は旅順の艦隊を破られ、浦鹽艦隊を傷けられましたので、新たにバルチック艦隊を繰り出し、それがはや途中まで來て居て、遠からず押し寄せて來る樣子ですから、わが海軍に於てはまたその用意をしなければ成りません。

それにこの旅順が、まだ陷落しない樣では、海軍は例の封鎖を解く事が出來ず。封鎖を解く事が出來ない樣では、隨つてバルチック艦隊に對する手配りも、十分に出來ない事に成りますから、東鄕司令長官は、殊の外心を痛め、乃木大將に意を傳へましたので、今は陸軍も猶豫せず、最後の大英斷を以て、大攻擊を行ふ事に成りますと、元より軍事に精通したまふ、我が大元帥陛下にも、大いに此事を嘉みし給ひ、卽ち十一月三十二日を以て、乃木第三軍司令官へ畏くも勅語を賜はりました。それは

『旅順要塞ハ敵ガ天險ニ加工シテ金湯トナシタル所ナリ。其攻畧容易ナラザル、固ヨリ怪ムニ足ラズ。朕深ク爾等ノ勞苦ヲ察シ日夜軫念ニ堪エズ。然レドモ今ヤ陸海兩軍ノ狀況ハ、旅順攻略ノ機ヲ綏ウスルヲ得ザルモノアリ。此時ニ當リ、第三軍總攻擊

✽ 最後の總攻撃 ✽

ノ擧アルヲ聞キ、其時機ヲ得タルヲ喜ビ、成功ヲ望ム情甚ダ切ナリ。爾等將卒夫レ自愛努力セヨ。』

と云ふ有難い御言葉でありましたから、乃木大將も大いに奮ひ起ち、『將卒一般深ク聖旨ヲ奉體シ、誓ツテ速ニ軍ノ任務ヲ遂行センコトヲ期ス。』と、謹んで奉答し、茲に又戰略を講じて、いよ〳〵二十六日から、最後の第四回總攻擊を開始し、何でも旅順を落さぬ間は骨に成つても此地を去るまいと云ふ、非常な決心を固めました。

此時我軍の眼前には、松樹山、東鷄冠山、二龍山、望臺、二百三高地などの、最も堅固な砲臺が、立ち閉がつて居りますから、我軍はまづ之に向つて、强襲を試みなければ成りません。

卽ち右翼隊の左翼は松樹山、中央隊は二龍山、左翼隊は東鷄冠山と、それ〴〵別れて進みましたが、此時右翼の他の部隊は、皆牽制の任に當つたのです。

されば右翼隊の松村中將は、最右翼の聯隊を以て、鳩灣附近の高地に向ひ、わざと猛烈に攻擊させましたから、之が爲めに敵の豫備は、急いで此方面に集まり、防備を嚴重にしましたので、我が牽制の目的は、首尾好く達せられる事に成りました。

そこで二十六日には、曉方から砲擊を初め、やがて午後の一時を合圖に、各方面とも運動を起し、矢庭に敵の塹壕に突入して、猛烈な襲擊を初めたのです。

雨霰と降る機關砲彈の下を、死骸を踏み越え、乘り越えながら、無二無三に突擊して、まづ要塞の胸壁に取り着き、それを攀ぢて乘り込めば、中にも防禦が嚴重に出來て居て、而も要處々々には、機關砲やら地雷火やらを備へて、わが突入を防ぎますから、流石勇猛の我兵も、全部を占領する事出來ず、只砲臺の一小部分を奪つて、敵と互ひに顏を見合はせ、兩方の手も屆く斗りの處に、また對陣せ

ねば成らぬ事に成りました。

第九章　決死の白襷隊

茲にまた第三軍の中に、少將中村覺の指揮を受けて、特別豫備隊として設けられた、一個の獨立隊がありました。

是は右翼、中央の兩隊から、特に選拔された屈指の勇兵でありますが、第四回の總攻擊の急先鋒として、驀地に敵陣へ突擊し、旅順の要塞を中斷すると云ふ、非常な大任を帶びまして、決死隊中の決死隊と成り、何れも非常な覺悟を以て、いよ／＼突擊する事に成つたのです。

さればその扮裝の如きも、わざと普通の軍服を用ひず、メリヤスの防寒襯衣の上に、白布の襷十字に綾どり、何れも生きては還らぬ覺悟で、勇み立つて進みましたが、恰もその出發の際、乃木大將は

其前に出て、一場の演說をしました。

『今日は如何なる場合であるか。陸には敵兵の大增加あり、海にはバルチック艦隊の來航あり。此時に當つて、我が攻圍軍の成功と失敗とは、卽ち國家の安危に關する、實に大切な場合であるぞ。諸君は今決死の覺悟を以て、敢へて突擊の壯擧を行ふ。實に本官も感奮する所ぢや。嗚呼、諸君が一死君國に酬ゆるの時機は、實に今日の外は無い、何卒確乎賴むぞ！』

と、如何にも思入つて陳べますと、隊長中村少將も、同じく部下を警めて、

『我が獨立隊の目的は、敵の要塞地を中斷するにあるのぢや。一人たりとも生還する心では成らん。若し吾輩が死んだら、渡邊大佐が之に代る。渡邊大佐が倒れたら、大久保中佐が代るのぢや。其他も皆この通り、順次に代る者を定めて置け！　襲擊は銃劍突擊が主ぢ

や。第一着の地歩を占める迄は、たとひ敵の猛射は受けても、一發も應射する事は成らんぞ。故無く後方に止まるか、漫りに隊伍を離れるか、又は退却するものは、皆隊長が斬つて棄てる。』

と、嚴かに云ひ渡しましたので、之を聞いた全隊の將士は、肉躍り骨鳴るまで、皆奮ひ立たずには居られませんでした。

で、一旦は休養して英氣を養ひ、やがて午後八時頃、この白襷の決死隊は、月の光を栞にして、松樹山砲臺へと向ひました。

元より命を的にした、鬼神も恐れぬ決死隊は、砲火の下を事ともせず、やがて松樹山補備砲臺に迫まり、その塹壕を距つこと、僅か二十米突の地點まで來ますと、敵はまづ地雷火を爆發させ、それにも痿まず壘下まで達しますと、今度は爆烈彈を投げつけますので、此爲めに我が損害は、忽ち非常な數に上りました。

けれども士卒は事ともせず、猶も進んで突撃すれば、今度は又機

關砲を以て、側面からも背面からも、隙間無く彈丸を浴びせ、塵殺にしやうと云ふ意氣組です。

塵殺！　元より決死隊と云ふからは、殺塵は決して恐れません。

が、それも時と場合に依るので、これが最初からの目的を、十分達してからの事ならば、命は決して惜くはありません。然るに今は其目的の、未だ半分も達せられないのに、此所で塵殺に會つては、全く犬死に成て終ひます。

と、見て取つた軍司令官は、元より大切なこの勇士を、犬死させては成らぬと云ふので、急ぎ傳令を發しまして、この決死の白襷隊に、一とまづ引揚げを命じました。

隊長中村少將の無念さ！　實に此時少將は、男泣きに泣いたのでありました。

尤も此晩は、只にこの隊斗りでなく、本攻撃隊に於ても、宵から

猛烈に戰つて、この決死隊に應援しましたが、何分敵の砲臺が堅牢に、防戰が頑强であつたので、折角の計畫も仇と成り、而も隊長中村少將まで、その膝頭に彈を受けて、重傷を受けるに至りました。何と殘念な事ではありませんか。

第十章　嗚呼二百三高地

抑も旅順と云ふ所は、一方海に面し、三方山を帶びた、天然の要害でありますが、之の背面を包んで居る山の中に、二百三高地と云ふのがあります。

二百三高地とは、高さが二百三米突あるので、我軍の假に斯う名づけたのでありますが、或はこれを旅順富士と云ひ、または鐵血山とも呼びました。

旅順富士とは、その山が此邊で一番高い故でありますが、これを更に鐵血山とは、實に松村將軍の命名なので、これは我が幾千の同胞の、鐵と血とで購ひ得たと云ふ、壯烈な歷史がある故です。

一體この山は、其位地と云ひ、高さと云ひ、旅順口の內部を見渡すのには、一番好い所でありますから、これを此方に奪つてさへしまへば、敵の運命はもう極まるので、云はゞ彼の山崎合戰の、天王山と云ふべき所です。

されば松村將軍は　先に九月の十九日から、四日間も此所に突擊して、多數の兵を犧牲にしましたが、遂に拔く事が出來ません。

そこで今度は、更に新手の兵を加へて、十一月廿七日から、是非とも占領する意氣組で、强硬に襲擊を試みたのであります。

で、まづ砲兵隊からは、盛んに砲彈を食らはせ、その砲彈が一々破裂して、烟は山上を包む頃、兼ねて號令を待つて居た突擊隊は、ドッと斗りに鬨を造つて、一度に山上に攻め登りましたが、この高

地と海鼠山との間に、赤坂山と云ふのがあつて、共に敵の要害ですから、それへも同じく突撃しました。

西と南の側面よりは、友安少將の部隊が向ひ、又西北の側面は、馬場少將(命英)引受けて、共に此間から丹精を凝らし、漸く掘り上げた攻路を傳はり、やがて砲臺の麓まで進んで、更に鐵條網を切斷し鹿柴を破壞して、尙も墓地に攻め入らうとしますと、今度は例の機關砲を以て、隙間も無く擊ち初め、それと同時に、大陽溝、鴨湖嘴及老鐵山の諸砲臺から、盛んに砲彈を飛ばして來て、我兵の頭上から浴びせかけますので、さしも勇氣に充ちた我が諸隊も、さながら蟻の群の上に、熱湯でも振りかけられた樣に、バタリ〳〵と算を亂だして、倒れる者引きも切らず、爲めに全滅した中隊は、何程あつたか知れない位でした。

此通りの有樣で、廿七日の襲擊は、何の功も無く中止と成り、次いで廿八日には、第七師團の大迫將軍も、新たに部下を率ひて、攻擊部隊に加はりましたが、まだ敵は動く色もありません。

偶々一方を突き破つて、山の頂に達したと思へば、忽ち他の砲臺から、十字の如く鐵火と降らされるので、再び棄てゝ歸へらねば成らず。友安、馬場の兩少將も、自ら戰線に現はれて、頻りに士卒を勵ましましたが、矢張り其の効は無く、味方は徒らに傷づく斗りで此日も暮れてしまひました。

そこで二十九日にも、非常の苦戰をやつた揚句、三十日の夜に至りまして、友安部隊の香月中佐は、村上大佐と相應じて、最も猛烈なる襲擊を行ひ、遂にこの險要の地を、辛くも占領しましたのは、午後十時でありましたが、隣の赤坂山の如きは、奪ひ取つては奪ひ還され、難戰苦鬪を極めながら、まだ乘取るに至りません。

すると、其夜も更けまして、十二月一日の午前一時三十分頃、敵

の増援兵六百斗りは、左手に銃を持ち、右に爆薬を提げながら、頗る鋭く逆襲に來まして、忽ち大激戰と成りました。此時新たに加つた齋藤少將の一隊も、力を協せて防ぎましたが、其間に村上大佐の隊は、幹部大方全滅して、夜の明ける頃までには、僅か四十人に成つてしまつた位です。

かう云ふ風で、味方は後方部との連絡を失ひ、擊つに彈丸無く、飲むに水無く、非常な苦境に陷りましたから、友安少將は殘念ながら、此處を棄てゝ退却しました。

が、何分連日の激戰に、彼我の死傷夥しく、屍は全く山腹を掩うて慘憺たる有樣と成りましたから、其處で互ひに相談して、戰鬪を一時中止し、死體の收容と隊伍の整理とに、空しく三日を費しましたが、其間に英氣も養はれましたから、やがて十二月五日には、再び突擊が初まつたのです。

但し此時は、齋藤少將(太郎)友安少將に代り、吉田少將(清一)と兩手に別れ、新來の精兵を以て奮擊突戰しましたが、敵も流石に此間から、非常に疲れて居りますので、この大切な地を、おめ〳〵我軍に明け放して、遂に後方へと逃げ込みました。

嗚呼二百三高地！ 實にこの要地を奪ふには、前に四日、後に十日を費やして、初めて我手に入りました。が、この爲めに我が同胞の、血を流し、骨を曝したことは、實に何千とも知れません。名づけてこれを鐵血山と云ふのも、元より當然の事であります。

第十一章　東鷄冠山の陷落

旅順の天王山二百三高地は、斯くして我が手に落ちました。攻圍軍の成功も、今は決して困難ではありません。一體今までは、旅順の軍港内に向つて、重砲隊の間接射擊を行つて居たのですが、その

照準を極めるには、彼の海鼠山に望樓を設け、其處で觀測して居りました。處が軍港の手前には、白玉山と云ふ小山があつて、その陰に成つて居る處は、何うしてもよく解りません。

然るに二百三高地を取つて、此處に觀測所を移してからは、何の邪魔に成る物も無く、港内が手に取る樣に解りますので、重砲の照準は、此處で全く正確なものと成り、丸で袋の物を叩く樣に、ドーン〳〵と擊ちます程に、その命中した彈丸の數は、合計二百四十八發。八月十日の海戰以來、此處に逃げ込んで小さく成つて居た、レトウヰザン、ペレスヰット、ポベイタ、ポルタワ、パーヤン、パルラダ、ギリヤークの諸艦は云ふまでも無く、運送船アムールまで、さながら射的の的の如く、散々に擊ち碎かれて、皆港内に居据つたまゝ、物の役に立たなく成つてしまひました。

處がゼバストポリー斗りは、まだ機關を破られなかつたと見えて、

港内に居たゝまらず、果は九日の朝霧に紛れ、港外さして脱け出しますと、此處には聯合艦隊が、兼てより嚴重に封鎖し、一艘でも出て來たら、目に物見せてくれるぞと、待ち構へて居た處ですから、忽ち水雷艇隊を以て、十二日より十五日まで、續けさまに襲擊し、とう〳〵饅頭山の下に、これを擊沈してしまひました。

それから月の中旬までは、また休戰に成りまして、互ひに戰場の死體を形付け、この埋葬や、又傷兵の手當やらで、時日を費して居りましたが、十八日の午後二時十五分、攻圍軍の一部は、東鶏冠山北砲臺の胸壁を、爆藥を以て擊ち破り、此處から一時に突擊しますのに、敵は機關砲と投爆彈とで、一生懸命に防ぎますので、思ふ樣に乘り込めません。

そこで鮫島中將(重雄)は、竹内少將(正策)と共に、自ら進んで部下を勵まし、豫備隊をも戰線に加へ、最後の大突擊を決行して、遂に全

く砲臺を占領しました。

一體この東鷄冠山は、第一回の總攻擊以來、屢々强襲を試みて、いつも思ふ樣に捗取らず、果は其爲めに、左翼隊長土屋中將まで、頭部に重傷を受けた位でしたが、代つて隊長に成つた鮫島中將が、遂に占領の功を奏したのは、やがて土屋中將の爲めにも、無念を晴らした事であります。

で、此時敵軍から降つた者の話によれば、この北砲臺の激戰では、敵軍の名將コンドラチェンコ中將を初め、少將イルマンは戰死し、中將フォークは負傷し、其他將校の擊たれた者も、決して少くは無かつたさうです。

第十二章　旅順の開城

さても旅順の攻圍軍が、第一回から第四回まで、壯烈を極め辛苦を盡した、攻擊の作業の間に、三十七年の冬も暮れて、新たなる三十八年の春は、はや目前に迫つて來ました。

時はその歲暮の二十八日。二龍山の砲臺は、其正面の胸壁を、例の爆藥に依て打破られ、其日の中に我手に落ちましたが、越えて三日。卽ち三十一日の朝から、松樹山の攻擊が初まり、難無く其胸壁を爆發させて、砲臺內へ突擊しますと、敵は我兵を塵殺にする心算で、兼て內部に仕掛けて置いた、地雷火を破裂させました。所が此時吹き上げた土砂は、却つて敵の退路を塞ぎ、其身をも土中に埋めてしまつたのです。

これで松樹山も陷落しますと、引續いて盤龍山東砲臺も乘取り、やがて望臺の敵壘も、明くれば三十八年一月一日を以て、めで度く我軍が占領してしまひました。

此等は直接の突擊でありますが、さなきだに此四五日以來、例の

重砲の猛力を以て、砲臺と云はず、市街と云はず、隙間も無く砲擊しましたから、今は敵將ステッセルも、なまじ頑强に抵抗して、此地を散々に踏み荒され、士卒を此上失ふのは、人情の忍びない所だと、流石に我慢の角を折り、スミルノフ、フォーク、ロウキルレン、

✤ 旅順開城 ✤

ロスチンスキーの諸將と、最後の會議を開いた揚句、遂に軍使を我が軍に送つて、開城降伏を申入れました。それは元日の夜の事でした。

もとよりさこそと待構へて居た、わが乃木司令官は、直ちに此事を電信に附して、大元帥陛下に申上げますと、仁慈に富ませ給ふわが大元帥陛下は、折返し勅を下だし給ひ、乃木大將の功勞を、十分御賞美あると同時に、敵將ステッセルが、殆んど一年足らずの間、よく籠城の苦節を守つた、忠義の程を嘉し給ひ、敵ながらも感心だと云ふので、今度の開城に就いては、ステッセルを優待して、その武士の名譽を保たしめる樣にと、寛仁大度を極めた、世にも難有い御沙汰がありました。

★ 旅順の要塞 ★

そこで次の二日には、双方の委員が出て、水師營に開城の談判を開き、互ひに調印を濟ませますと、三日四日の兩日の中には、此の旅順の要塞を初め、軍港に於ける一切の物は、皆日本の物に成つたのであります。

去年二月十一日、宣戰の詔勅が出ましてから、三百二十四日目、即ち一月の二日を以て、旅順は我手に落ちました。旅順は我手に落ちました。

第十二編　奉天の巻（上）

第一章　敵の中立地横行

敵が金城湯地と恃み、難攻不落と誇り切つて居た、彼の旅順の要害は、我が勇猛絶倫の包圍軍の爲めに、遂に陥落してしまひましたが、恰もその陥落と同時、即ち一月の二日の事です。北滿洲の方面の敵は、ミスチェンコ將軍の指揮に下に、小癪にも逆襲を試みて來ました。

而もその逆襲は、正々堂々の軍略を用ひず、例の卑怯な戰術で、何等の防備もしては無い、中立地の方から廻つて、矢庭に牛莊を陥れ、更に營口をも奪ひ還さうとして、大いに此處を騷がせました。

これと云ふのも、畢竟敵は我が後方を破り、兵站線を斷ち切つて

前方に進んだ大軍を、兵粮攻にして窘めやうと思つたからで、蓋し其計畫は、去年の十二月の末から、已に企てられた事であります。

されば敵の騎砲兵は、凡そ百二十名斗り一隊と成つて、新民屯から南進し、二十九日には遼河を渡つて、無遠慮に中立地へ踏み込み何も知らぬ支那土民を、威し付けては食物を徵發し、貨財を掠奪などしながら、明けて一月の二日には、海城新臺子の間に出まして、いきなり鐵道線路を壞し、電信柱を押倒して、又中立地を引揚げました。

然るに我軍は、元より軍律が嚴重で、中立地を冒すなどゝ云ふ、亂暴な事は決して仕ませんから、隨つて此邊には、多くの兵を置いて無かつたのです。

するとまた敵は、此體を見屆けまして、此機乘ずべしと云ふので、續いて三千騎斗りの大部隊を繰り出し、七日は再び遼河を渡り、鞍

山店と海城との間で、又もや鐵道線路を破り、九日から十一日にかけては、大石橋と海城の間を、頻りに破壞に掛りました。

是より先我軍では、敵の此の計畫を知つて、決して棄てゝは置かれませんから、此の憎むべき惡戲者を、速かに追拂つてしまふ樣に と折から遼陽に駐屯して居た、安原大尉(政雄)に命じました。

安原大尉は此命を受けますと、直ちに部下の一個中隊を率ひて、一月三日に遼陽を發し、先づ太子河の左岸に進んで、接官堡を本據とし、斥候を放つて敵狀を探らせましたが、何分敵は中立地を冒して、巧みに跡を晦ましますから、全體何程の兵數があるのか、一向知る事が出來ませんでした。

すると、漸く十日頃に成つて、敵の一部隊が太子河の對岸の、小馬糞泡と云ふ處で、集合して居るのが解りましたから、それ逃がすなと安原大尉は、直ちに接官堡を發し、小河口から太子河を渡つて

漸く小馬糞泡に近づきすまと、敵は兼て用意して居たものか、四五百騎宛三團に分れ、我が安原隊を三方から包んで、一人も餘ますなと云ふ勢に、鋭く擊つて掛りました。

第二章　牛莊の陷落

されば我が安原大尉は、小馬糞泡の敵兵を相手に、凡二時間斗りと云ふもの、激しく銃火を交へましたが、その間敵は頻りに新手を增すのに、味方に少しも補充が無く、此爲めに我が兵は、次第に旗色が惡く成つて來ました、

其中に日も暮れかゝりましたから、此附近の小部落に、暫く兵を引揚げて、敵の鋭鋒を避けやうとしますと、敵はまた此體を見て、更に猛烈に射擊しましたので、安原大尉を初めとして、其他の將校下士卒に至るまで、大方手傷を受けました。

✽牛荘の陥落✽

けれども勇敢な我兵は、死物狂に戰つて、漸く目的の小部落を、占領し、此處の百姓家に死傷者を擔ぎ込んで、手當を仕やうと思ひましたが、元より百姓共は逃げてしまつて、後はまるで空屋同様、燈も付かねば、湯水も無く、只息を休める斗りです。

處が彼の憎むべき敵は、高粱稈を澤山擔ぎ込んで來て、やがて是に火を放ち、我兵を燒討にしましたから、今は此處にも留まる事出來ず、岩井中尉、小村少尉など、身に數ヶ處の創を負ひながら、軍刀を揮つて躍り出で、辛くも一方の血路を開いて、接官堡の方へ退却しましたが、憐むべし安原大尉は、已に重傷を受けて身動きが成らず、其他の負傷者と共に、此の猛火の中に在つて、壯烈な戰死を遂げてしまひました。

されば小馬糞泡の戰鬪は、殘念ながら我が不利と成つて、其地を敵に委かせたまゝ、一旦退却の事に仕ますと、敵はまた勝に乘じて、直ちに牛莊城へと襲ひ掛つて來ました。

此處には大尉牧常彦が、兼て守備隊の指揮を取つて居ましたが、敵の來襲を聞くと等しく、山崎騎兵少尉(範之)を遣つて、まづ偵察をさせやうとしたのです。

★奉天の巻★

然るに山崎少尉の隊は、途で大部隊の敵に出會ひ、少尉は奮戰の中忽ち戰死し、生き殘る者僅に三騎、漸く其場を斬り拔けて、歸つて此事を報告しましたから、『それこそ油斷は成らぬぞ』と云ふので牧大尉は部下を勵まし、防備の手配をして居りますと、敵はやがて三千騎斗り、勢鋭く押寄せて來ました。

兼ねて覺悟の守備隊は、この大軍を引受けて、力の限り防ぎましたが、元より多勢に無勢ですから、心ばかりは猛くても、前後七時間の長戰の中には、遂に一方の城壁を破られ、汐の如き敵兵は、其處から亂れ入たのであります。

されば牧守備隊長も、『今は是まで』と思ひますから、一旦此處を明け渡すとも、重ねて取り還へす事もあらうと、生き殘つた部下を率ひて、敵の一方を突き破り、牛家屯さして退却しましたが、途中で敵彈の爲めに重傷を受け、やがて敵の手に落ちて、無殘の最期を遂げました。

又牧大尉の戰死の後、之に代つた笠原少尉も、同じく傷いて敵手に斃れ、最後に大川少尉の指揮で、漸く牛家屯の守備隊に合しました。

此の通り我が守備隊は、事の不意に起つたのと、兵數の彼に及ばなかつた爲めに、難戰苦闘の其効無く、遂に牛莊を奪はれました。

あゝ牛莊は奪はれました。が、我が勇武なる滿洲軍は、是をおめおめ敵に渡して、再び取り還さずに置かれえせうか！

第三章　牛莊の回復

遂に牛莊を奪取つて、勝に乘じた露兵共は、更に南の方に進んで、我が兵站部の最も要地なる、營口をも乘取らうと云ふので、十二日の朝には、はや牛家屯へ向つて來ました。

牛家屯とは、營口の停車場のある處で、市街からは僅か一里より離れて居ませんから、若し此處を奪はれゝば、營口も共に取られた事に成ります。

されば此處の守備隊長は、營口の守備兵を初め、補助輸卒其他の非戰闘員まで狩り集め、全員を塹濠の中に潛ませて、今にも敵が襲つて來たらば、十分手近く引寄せてから、一度にドッと擊ち出して一と泡吹かせてやらうと云ふ意氣組で、手藥布いて待つて居ました。

其中に十二日の午後に成ると、敵は十二門の砲口を揃へ、二千五

百米突の距離から、我が兵站司令部目がけて、ズドン〳〵と撃ち込みましたが、味方はわざと靜まりかへつて、只の一發も應へません から、『さては今迄の手並に恐れて、はや逃げ落ちてしまつたな』と敵は大きに得意に成り、やがて間近く進んで來ました。

✽牛莊の回復✽

處を待ち構へて居た我軍は、一度に立つて射撃を初め、二度ならず三度までも、鋭く突擊して來るのを、一々撃退してしまひましたから、流石の敵も氣味惡く成り、此處に六十三の死骸を殘したまゝ一とまづ牛莊へと引揚げたのです。

茲に我が滿洲軍には、此頃初めて加はつた、新手の一大兵團がありました。それは有名なる立見中將の下に、東奥の健兒を網羅した弘前の第八師團でありましたが、此滿洲へ渡つてから、實はまだ一度も戰はず、私かに腕を鳴して居る斗りでした。

そこで大山總司令官は、此の逆襲の敵兵を撃退し、牛莊城回復の任務を、此の新兵團に命じましたから、兵團長立見尙文は、更に之を部下の驍將、大佐津川謙光に命じました。

★奉天の卷★

今まで無事に苦んで居た津川大佐の一枝隊は、此命を聞くと等しく、時こそ來たれと勇み立つて、即ち主力は牛莊附近に向ひ、一部は高力附近に於て、太子河を渡つて六臺子に至り、又騎兵の主力は五臺子附近に出で、遼河の右岸を北へと來る、敵を食ひ止める計畫で、それ〴〵陣地を發しました。

時は一月十三日、午前七時三十分、津川枝隊は耿家庄子を發しますと、恰も此時、敵は步騎兵總て二千斗と、八門斗りの砲を持つて牛莊の西の方を、西北さして進んで來る樣子ですから、それこそ望む好敵手と、夕方から途を變へて、身を切る斗りの寒氣の中を、二度まで太子河の氷を渡り、やがて十四日の曉頃、三叉河附近に宿營して居る、敵の大軍と出會ひました。

されば我軍は戰略を定めて、いよ〳〵これを攻擊する事に成りましたが、やがて午前七時四十分、前衞としし進んで居た、門脇、水野の兩中隊が、三叉河に向つて發射した、猛烈な一齊射擊に依つて戰鬪の幕は明いたのであります。

此時また市橋少佐は、其砲兵大隊を以て、敵の右翼に射擊を加へ敵も亦これに應じて、砲火漸く激烈に成りました頃、散兵線の奮鬪も、其處此處に起りまして、例の修羅場の活劇は、大いに面白く成つて來ました。

其中に敵の大部隊は、遼河の右岸を西に向つて、急行するのが見えましたから、味方は隙かさず之に向つて、盛んに砲火を浴せかけますと、敵は之が爲めに步調を亂し、漸く狼狽の體を見せました。其處をまた我が步兵は、追ひ迫つては猛射を加へ、氷りつめた川の上を、自在に驅け廻り、走り進んで、息をも次がず突擊する、其鋒

先の鋭さには、敵も大いに氣を呑まれて、果は我先にと逃げ出しました。

元より新手の勇兵は、此體にます〳〵勢を得て、とう〳〵敵の大軍を、鄭家店方面に追拂ひ、凱歌を勇ましく揚げましたのは、午前十時でありました。

尤も此時の戰は、敵も全力を盡したのでは無く、只奇襲が我か背後を突き、若し都合好く行つたなら、沙河方面の軍と相應じて、我が滿洲軍を狹擊にしやうと、健氣にも此處まで來たのでしたが、津川枝隊の鋭鋒に出會ひ、かく散々に破られたからは、初めの勢ひ何處へやら、折角取つた牛莊まで、間も無く我軍の手に還して、例の中立地を踏み荒らしながら、北へと逃げてしまひました。

かくて牛莊城は、見事我手に回復したのであります。

第四章　種田枝隊の退却

まことに牛莊回復の事は、立見兵團の功でありました。が、それは畢竟腕試に過ぎません。此後間も無く開かれた、黑溝臺の會戰こそは、實に此兵團の本舞臺でした。

抑も此の黑溝臺と云ふ處は、遼陽と奉天との間、少し西に寄つて渾河の邊にある一部落でありますが、先に沙河の會戰に、我軍の之を占領してからは、騎兵大佐種田銳之助が、一個聯隊餘りの騎兵と歩兵若干、機關砲若干とを以て、守備の任に當つて居たのですが、其の歩兵一部隊は、西の方頭泡と云ふ處にも分れて、同じく守備をして居りました。

すると一月二十二三日頃、敵は渾河の右岸に動き初め、二十五日の午前九時、七千斗りの歩兵隊が、土臺子まで進んで來て、烟臺子及黃蠟蛇子附近の我が前哨線を、攻擊して來たと云ふ報告ですから、我守備隊は大いに警戒して居りますと、元より前哨の事ですから、大部隊の敵には支へ兼ねて、何れも黑溝臺さして退却して來ました。

すると敵は、得意に成つて渾河を渡り、三面から黑溝臺を包んで、一擧に乘取らうと押寄せて來る樣子です。

そこで種田大佐は、騎兵の全員をまづ戰鬪陣地に就かせ、同時に數門の機關砲を、黑溝臺から黃蠟蛇子に配置して、前面の敵に當らせましたが、元より優勢なる敵は、まづ砲火を以て我軍を惱まし、其下を追々に進んで來ました。

此時幸ひにも後方からは、中佐小原文平が、援護隊を率ひて駈け付けましたから、これを烟臺子、土臺子の方面に向はせ、やがて戰鬪は初まつたのであります。

けれども敵は大軍を以つて、我が陣地を押包んで攻めますから、

味方の防備の困難は、元より一通りではありません。其中に頭泡を守つて居た、樋口少佐(嘉吉)の一隊も、衆寡敵せず陣地を棄てゝ、此方へ引揚げて來ましたから、敵はます〳〵勝に乘つて、午後六時半頃には、我が黑溝臺の陣地は、四面敵の中に包まれてしまひ、急雨の樣な敵彈は、絶えず頭上から降り掛つて、此處彼處に火災は起り果はその猛火の中に、我兵全滅の有樣と成りました。

是に於て種田大佐も、流石に術の施し樣も無く、此上はなまじ犬死するより、一旦此處を退いて、更に回復を謀るに如かずと、小原中佐諸共に、逸り立つ部下の士卒を集め、其夜の闇に紛れて、蘇麻堡から後方古城子の方へと、靜かに引揚げる事に成りました。

第五章　老橋の難戰

是より先立見兵團は、ミスチェンコ將軍の奇襲を追拂つた後、更に黑溝臺方面の敵をも、速かに擊退する樣にと云ふ、重任を受けて居りましたから、立見師團長を初めとして、依田(慶太郎)田部(正壯)岡見(正美)の三旅團長、何れも勇みに勇み立ち、歩武堂々と宿營地を立つて、黑溝臺へと志しましたのは、二十五日の眞夜半でした。

然るに種田枝隊は、はやその陣地を棄てゝ、此方へ引揚げて來る所ですから、『スワ猶豫する時で無いぞ。』と、直ちに依田少將を左翼に、岡見少將を右翼にして、まづ黑溝臺に向はせ、田部少將を豫備として、立見將軍はこれと共に、中央から進んで行きました。

其所で右翼の岡見少將は、先に先發の援軍として、烟臺子方面に奮鬪した、小原中佐の部下の一隊を、古城子まで出して、其所の守備隊を助けさせましたが、其中に夜が明けますと、敵は更に前進して、老橋を占領しやうとして居ります。

老橋と云ふのは、元より五六戸の小部落でありますが、黑溝臺と

沈旦堡との間の、平原の中央にある高地ですから、これを占めると占めないとは、兩軍に取つて大切な事なのです。

されば我岡見隊も、是を敵に取らせては成らぬと、勢鋭く敵に當り、暫時挑み合ふ間に、敵は恐れて退却しましたから、我兵はこれを追つて行きますと、それを見て中央の田部隊も、前進して老橋の左に散開し、同じく射擊を初めました。

✽老橋の難戰✽

すると此時迄默つて居た敵砲は、黄溝臺を初めとして、右は柳條口、中央は菲菜河子から、凡そ三十門斗りで、一時に砲擊を初め、而もその照準が、兼て測つて置いたものと見えて、一々我が頭上へ來ますのに、所は開いた雪の廣野、何の隱れ場所もありませんから、味方は此の爲に惱まされ、陣頭に立つて指揮をして居た、小原中佐も敵彈に中つて、名譽の戰死の魁を爲し、續いて遠山、尾上の二中佐も傷き、其他此所の戰場の、銀を欺く白雪を、滾々たる鮮血に染めて、忠君愛國の赤い心を、遺憾無く現はした將校下士卒は、殆んど全軍の三分の二に及びました。その苦戰の有樣も、大方察せられるではありませんか。

★奉天の巻★

けれども勇猛なる岡見少將は、『全軍殘らず斃れるまで、一歩も此處は退かぬぞ。』と、頻りに部下を勵まして、尙も突擊する程に、敵もこれには近づく事出來ず、只遠くから砲擊する斗りで、其日も暮に迫りました。

第六章　依田部隊の苦鬪

さてまた左翼に進んだ依田少將は、小澤大佐(秀治)を第一線とし、津川大佐を豫備として、二十六日の午前十時、蘇麻堡から五臺子方面に展開し、黒溝臺の敵に對抗しました。

然るに其頃我隊は、此方面に一門の砲さへ持ちませんでしたが、

敵は渾河の右岸烟臺子に、二十八門の巨砲を備へ、また頭泡の南に二十門、北屯子の西方に七門、都合五十五門から、雨霰と砲彈を浴びせかけますので、我軍は又此爲めに、少からぬ損害を受けて、一歩も進む事は出來ません。

津川大佐は此體を見て大いに憤慨し、『空しく止まつて死ぬよりは、進んで戰死するが優だ。黒溝臺はゝや眼の前ぞ。皆續け〳〵！』と、大音に指揮をしながら、自ら軍刀を振り立てゝ、眞先に躍り出しましたから、これに部下も勵まされて、隙間も無い火の雨の中を、千米突斗り突進し、小高い砂山に陣地を占めて、此處に暫く息を入れました。

すると敵は、元より我隊に砲兵の無いのを、初めから侮つて居りましたから、三方から押包んで、果は依田少將の全部隊は、全く敵の重圍に落ち、小澤、津川の兩隊も、遂に聯絡を斷たれてしまつたのです。

けれども味方は少しも屈せず、一人でも生存して居る間は、一歩も此處は退くまいと、必死に成つて敵に當り、此處彼處に奮鬪激戰殆んど壯烈を極めました。この爲めに小澤隊では、一個中隊僅に三十人を餘し、津川隊では武田旗手を初め、將校下士卒の負傷戰死は殆んど算へる間も無い位でしたが、その中に夜に成りましたから、一旦戰鬪を止め、今度は急造の掩堡を築いて、此處に一夜を明かす事に成りました。見渡す限り雪の野山、その雪を穿ち氷を掘つて、僅に造つた掩堡の中に、霜を浴びての露營の苦しさ！　晝間鐵火と戰つた勇士は、夜に入つてまた寒氣と云ふ、更に獰猛な敵と戰つたのであります。

明くれば二十七日、見れば右翼前面の敵は、一時退却した樣子ですから、田部少將の隊が更に中央隊と成つて、蘇麻堡、老橋の間に

配置し、依田部隊は依然として左翼に、また岡見部隊は右翼に、老橋の北に散開して、三面一度に運動を初め、黒溝臺の總攻撃に掛りました。

✽ 依田部隊の苦闘 ✽

此の大運動は、午前十時頃から始まりましたが、午後一時と思しき頃、突然として敵の砲兵が、我が右翼方面に現はれ、盛んに射撃を初めましたから、古城子に陣取つて居た、立見將軍の司令部さへ、屢々敵彈の御見舞を受けて、實に危險な事でありました。

其中午後三時頃に成りますと、増援隊として向つて來た、木越中將(安綱)の兵團の一部が、此處に到着しましたから、直ちに右翼の敵に當つて、忽ちの中に追拂ひ、續いて同じ木越兵團の、村山少將(邦彦)の一部隊も、左翼の方へ援護に來て、修二堡の方へと躍り出ました。

けれども彼の依田部隊は、相變らず敵の包圍中に在て、まだ苦境を出る事が出來ず、殊に津川隊の如きは、敵と三四百米突の處まで近いて、頻りに射撃して居ります中、何分にも昨日から、本部隊との聯絡は斷たれ、其爲め彈藥の補充が出來ず、今は最後の手段として、例の突貫をやらねば成りません。

★ 奉天の巻 ★

其時恰も敵からは、新手と見える騎兵の一群が、雪を蹴立てゝ幕地に、わが陣地を襲つて來ました。勇猛無双の津川大佐は、見るより自ら大刀を閃かして、部下と共に之に當らうとする時、忽ち一彈飛び來つて、まづ右の太腿を貫き、續いて左の腿にも傷け、その進退の自由を奪ひました。

其所で仕方がありませんから、塚本少佐(芳郎)之に代つて、聯隊の指揮を取りましたが、是にも一丸飛んで來て、まづその前額部を貫き、それでも屈せず大聲あげて、頻りに部下を勵ます所へ、第二の敵彈が眞向から、胸部に命中しましたので、『殘念』と云ふ聲さへ立

てず、其儘斃れてしまひました。

塚本少佐の戰死の後は、井坂少佐(藝)が之に代り、猶も奮戰を續けましたが、何しろ目に餘る大敵に、四方を包まれて居るのですから、居ながら的に成つたも同然、味方は斃れる者、傷つく者、見る〳〵中に山を築き、遂には將校大方討たれて、軍曹自ら指揮した隊が、二三個中隊にも及びまして、此儘此所に時を過せば、聯隊全滅の外は無いと、津川大佐も覺悟を極め、果は自ら軍刀を取り直し、腹を切らうとさへしましたが、部下が熱心に諫めるので、漸くに思ひ止まり、やがて夜に入るを待つて、一とまづ蘇麻堡まで引揚げたのです。

此時また小澤隊も、同しく敵に圍まれて、非常の苦戰を仕た揚句これも夜の闇に紛れて、三尖堡まで退却し、此所で隊伍を整ますと、勝に乘つた敵兵は、歩騎兵が打ち交つて、此所までも激しく追擊して來ましたが、我が將士は必死と成つて、此の陣地に踏み止まり、激しい混戰亂擊の後、とう〳〵敵を追拂つたのは、はや曉近い頃でありました。

第七章　蘇麻堡の亂擊

茲にまた田部少將は、初め豫備隊として、立見兵團長の下に留まりましたが、右翼の岡見部隊、左翼の依田部隊、共に苦戰と見えましたので、やがて中央隊と成つて、戰線に現はれる事になりました。

田部々隊には、森川中佐(之)渡邊大佐(武)の兩隊が在りましたが、二十六日午后三時、森川隊はまづ沈旦堡に向ひました。此日は敵と出會はずに暮れ、次の二十七日、森川隊は渡邊隊と併んで、蘇麻堡の近所まで進みますと、忽ち敵砲の亂射を受けて、副官天野大尉まづ傷き、續いて爆發した敵彈は、田部少將の右の膝頭を貫いて、大い

に部隊を騷がせました。

そこで渡邊大佐は、代つて部隊の指揮を取り、苦戰の間を猶進んで行きますと、隣の森川隊の如きは、中佐自ら軍旗を奉じて、士氣を鼓舞しながら奮戰し、漸く蘇麻堡の村落に入りましたが、何分にも敵の砲擊が激しいので、一歩も外へ出る事が出來ません。

其中夜に成りますと、敵は大舉して夜襲に來たり、まづ村落に火を放つて、その火の火明を目標に、喇叭太鼓を鳴らしながら、我が陣地に迫つて來ましたが、中には探照燈を以て、我が隊の動靜を見ながら、機關砲を注ぎかける、その勢の凄まじさ、とても防ぎ樣が無い位です。

けれども勇敢な我が兵は、此所を先途と防戰し、中にも三村大隊の如きは、最も激しく鬪ひまして、その夜の明けるまでに、遂に前面の敵を擊ち破り、非常の損害を與へた上に、二百四十人程の敵兵を、其場で降參させた位ですが、惜むべしその大隊長、勇武絶倫の三村少佐(幾太郎)は、この曉方の奮戰の間に、眉間を敵彈に擊貫かれて、遂に名譽の戰死を遂げました。

第八章　增援隊の運動

さても立見兵團は、一月二十五日を以て、初めて運動を開始しましたが、その後三晝夜の間は、各部隊とも苦戰を續けて、その困難は一方ならず、而も目指す黑溝臺は敵に取られたまゝ、まだ取り還へす事が出來ません。

其上前線に進んだ隊には、給養が思ふ樣に行き屆きませんので、只さへ頑强な敵を扣へた上に、尙飢渴と云ひ、寒氣と云ふ、恐ろしい敵の襲擊を受け、此等と奮鬪力戰する勞苦は、實に一通りでは無かつたのです。

されば總司令部に於ても、此の困難の有樣を見て、今は棄ておくべき時で無いし、さてこそ十里河に宿營して居た、木越將軍の第五師團を、增援隊として繰り出しました。

是に於て木越兵團は、二十六日の夜半を以て、其宿營地を發し、途を急いで翌朝には、はや半狼洞溝に達しましたが、此所から村山少將の部隊を、立見兵團の左翼に派遣し、殘る主力はその右翼に連る樣に、小甸子へと進ませました。

其の日の午後三時頃には、大臺、小甸子、及び斜に沈旦堡の線に展開して、敵と對戰する事に成りましたが、何分にも此邊は、見渡す限り茫々とした、廣い平野でありますから、敵の砲火を受けるのに、何の身を掩ふ物もありません。

其中で我兵は、大膽にも終日戰鬪をつゞけ、其夜は此所に露營しましたが、此間に村山部隊も、修二堡附近の敵と對陣して、戰線に

夜を明かしたのであります。

明くれば二十八日、木越兵團の主力は、柳條口に向つて突入し、午前の中にこれを占領して、午後には李家窩棚まで乘取りましたが、此日西島中將の第二師團からも、小原少將(芳次郎)增援隊として、谷山(隆英川崎(寅三)の兩大佐、河内中佐(禮藏)の一隊と、多田(保房)砲兵隊の一隊とを率ひて、同じく應援に走せつけ、三尖堡から八臺池の敵に向つて、盛んに攻擊を初めましたが、凡そ一時間斗りに、これを洪家窩棚方面に擊退しました。

所でまた新手として、木越兵團の石田大佐(保謙)が、一晝と二夜半の間、強行軍を續けて驅け付け、二十八日の朝蘇麻堡に達して、立見兵團の左翼に到り、途中の疲勞を休めもあへず、直ちに戰鬪に參加しました。

此通り立見兵團は、初め優勢の敵に當つて、一旦苦境に陷りまし

たが、今や相次で來る增援隊に、大いに元氣を得ましたから、此上は何の恐るゝ事があらう。一擧黒溝臺の敵を突いて、微塵に踏み碎いてやらねば成らぬと、非常な意氣組を以て、いよ〳〵大夜襲に掛る事に成りました。

第九章　黒溝臺の回復

さても中央部隊は、先に田部少將負傷して、渡邊大佐の指揮する所と成つて居ました。又其森川隊では、三村少佐戰死の後、今まで豫備であつた湯淺少佐は、關口少佐と共に前進して、黒溝臺附近へ向ひましたが、只さへ廣々とした野道の上に、雪は白く降り積り、その上を行く人は、烏の下りた樣に黒く見えますから、之を狙つて擊つ敵彈は、殆んど中らぬと云ふ事無く、徒らに兵を損じる斗りですから、少佐はやがて思ひ返へして、一旦進擊を見合はせ、更に夜

に入るを待つて、强襲を試みやうと決心しました。

で、その夜の十一時頃、時分は好しと湯淺少佐は、再び前進を初めまして、やがて小高い所まで行き着きますと、此所からはもう黒溝臺は、其間七八百米突に過ぎません。『愉快々々！　黒溝臺は彼だ。今一と息ぢやしつかりやれ！』と、少佐は陣頭に立つて、頻りに部下を勵まして居りましたが、先刻から亂射して居た敵彈は、忽ち湯淺大隊長を、其場に斃してしまひましたので、副官高野中尉が、代つて指揮を取る事に成りました。

けれども關口少佐は、まだ傷だも受けませんから、勢鋭く突進して、まづ蘇麻堡の敵を擊退し、前方一千米突を距てゝ、黒溝臺の敵と睨み合ひました。時は二十八日の夜、立見將軍が全部隊を擧げて大夜襲の命令を傳へたのは、卽ち此時なのであります。

尤も此時は、敵も新手の我が兵の爲めに、前面の陣地を奪はれて、

勢ひ當り難いと悟りましたから、此上は力の限り、此の黒溝臺を守るの他は無いと、その前の高地には、機關砲を澤山に据ゑつけ、我軍の前進をば、此所に食ひ止めやうとしました。

其所を又我兵は、無二無三に攻め掛けて、彈を潜り屍を乘り越え、奮擊突進しましたが、やがて其夜も午前一時頃、敵は漸く支へ兼ねて、其の一角から崩れ初めますので、味方は得たりと付け入つて、其陣地を奪はうとしますと、又もや午前三時頃に成つて、敵は大擧して引返へし、一旦痿んだ勢を、今一度盛り返さうとしました。

けれども我兵は事ともせず、凡そ一時間斗り戰つて、再びこれを擊退しましたが、昨日湯淺大隊の力で、我手に占領した彼の高地は、此時始終敵を見おろし、射擊に非常な便利を與へましたから、隨つて敵を惱ました事も、亦非常な事でありました。

されば流石に頑强な敵も、次第々々に足元亂れて、遂に全軍總崩

れと成りましたから、各隊齊しくこれに迫つて、激しく黒溝臺へ攻め入りましたが、中にも關口大隊は、先登第一に躍り込んで、黒溝臺の西北の端に、高く國旗を押し立て、更に又敵を追つて、難無く渾河の氷を渡り、烟臺子、土臺子まで占領しました。

かう云ふ風に、日夜の苦戰難鬪の揚句、遂に全く黒溝臺を回復して、全軍等しく萬歳を唱へたのは、二十九日の午前九時半でありました。是れ偏へに立見兵團の、堅忍不拔の致す所で、その功勞は滿洲の雪にも、決して沒し難いのでありますが、またそれと同時に、木越、西島の兩兵團が、これを援けた敏活な動作も、與つて大いに力があつたのです。

また敵はと云ひますと、少くも七八個師團の兵力を有し、これを我が兵數に比べると、殆んど二倍以上の優勢でした。

その優勢の敵は、又しても我が破る處と成つて、その方面の指揮

を取つた、ミスチェンコ將軍は負傷をし、またこの逆襲を計畫した、クリッペンベルグ將軍は、此の敗軍を恥ぢたものか、病氣と云つてクロパトキンに別れ、本國指して歸つたと云ひます。何と好い醜態ではありませんか。

第十章　大戰の準備

一體今度の逆襲は、元より中立地を踏み荒らした、卑怯な擧動には相違ありませんが、それでも自分から手を出して來たのは、敵ながらも健氣な處であります。

然るにその大計畫も、成功したのは一時の事で、前には牛莊で追ひ捲られ、後には黑溝臺で擊ち掃はれ、散々の體と成りましたから、敵は一旦鋒を納めて、更に他の策を講ずる事に成りました。

これに對してまた我軍も、同じく作戰を計畫しつゝ、暫時睨み合

ひの有樣に成りましたが、今その陣地を見渡しますのに、例の沙河を間に狹んで、凡そ四十里に亙る間、堡壘を築き、塹壕を掘り、互ひに守備を嚴重にして、戰機の熟すのを待つて居たのですが、其間に雙方とも、段々兵數を增して來て、果は合計八十五萬、之に對して砲の數も、雙方で二千五百門に及ぶと云ふ、非常な大軍と成りました。

尤も此時我軍は、已に旅順を陷れてしまひましたから、之に專ら向つて居た、例の乃木大將は、第三軍の勇將猛卒を率ひ、直ちに此の方面に轉じて、奧大將の第二軍と併び、最左翼に立ちますと、これに對して、先に大孤山に上陸してから、遼陽攻擊の中軍に働いた川村大將の一軍は、黑木軍と相併んで、鴨綠江の方面から最右翼を進み、又その中央の司令部には、大山元帥を始めとして、參謀長兒玉大將、福島中將、井口少將、松川少將などと云ふ、帝國第一流の

名將が、悉く之に參與して、是が總掛りで戰はうと云ふ、未曾有の大活劇は、はや眼前に迫つて來ました。

✽大戰の準備✽

されば黑溝臺の激戰の後、凡そ二十餘日の間は、銃の音さへ聞えませんでしたが、越えて二月の中旬、戰機は遂に熟したと見えて、彼の未曾有の大活劇は、忽ち幕を明けたのであります。

尤も此時我軍は、最右翼の大兵團を以て、興京撫順の方面から、敵の側背を衝くやうに見せますと、敵はこれに全力を注いで、撫順方面の防禦に掛りました。

其間に最左翼の乃木大將は、敵の虛に乘じて驀地に進み、其背後を斷たうと云ふのが、我が計略であつたのですが、敵帥は少しもこれを悟らず、例の通り我が右翼のみを恐れ、彼の沙河の時の樣に、專らこれに向つてのみ、大襲擊の姿勢を取つたのは、まことに淺墓な話でした。

さればこそ敵軍は、一度び兵火を交へるが早いか、急ち中央から切斷されて、一面は奉天以北に壓迫され、一面は撫順附近に包圍され、前を擊たれ、後を突かれ、支離滅裂の有樣と成つて、如何ともする事出來ず、總大將クロパトキンさへ、大切なその主力を棄てゝ命がら〳〵逃げ出したと云ふ、目も當てられぬ大敗を取りました。

★奉天の卷★

實に奉天の會戰は、未曾有の大戰爭であつたと同時に、遼陽でも沙河でも、まだ見た事の無い大打擊を、敵の面上に食はせて、容易に二度と立てれぬ樣にしたのです。

第十一章　城廠の敵襲

さて敵軍は、黑溝臺の敗北の後、暫く手も出さずに居りましたがやがて一月末から二月へかけて、今度は我が右翼軍を相手に、卽ち城廠方面に向つて來ました。

✽城廠の敵襲✽

一體此方面で、兩軍の最も近づいて居たのは、河南と云ふ所でありましたが、敵も此頃に成つて頻りに兵を增し、その兵站部を三家子に置いて、今にも大擧して襲つて來る樣子ですから、なまじその襲來を待つより、此方から討つ出て、その機先を制するが得策だとそれ〴〵手筈を定め、其守備に當つて居た片倉隊は、遂に一月廿七日を以て、下夾河前面の敵陣へと進擊しました。

で、其陣地を立ちましたのは、午後七時頃でありましたが、翌二十八日の午前三時には、已に目的の地に達しました。

尤も此時は、別に一隊を敵の背後に廻はして、巧く夾擊にする計畫でしたが、敵ははやくも我が前哨を見附けて、警戒の砲を發しますと、それを合圖に散兵壕からは、一度に銃火を發しましたから、元より覺悟の片倉隊は、直ちにそれと射擊を交へ、此所に激しい戰鬪を始めましたが、何分にも敵兵は、堅固な陣地を占めて居り、之

に反して寄手の方は、何の隱蔽物も無い所を進みますので、如何に勇敢に戰ひましても、損害の多い割合には、一向效驗が見えません。

其中に敵兵は、我兵を小勢と侮つて、一擧に揉み崩さうと思ひ、散兵壕を躍り出で、二十米突近くまで突擊しましたから、此方も同じく銃劍を閃かして、夫と渡り合はうとはしましたが、先に他の路を進ませた別隊が、途中で地理を誤まり、此時までまだ到着しませんから、なまじ此所で戰ふのは、折角の計略を仇にするものだと、殘念ながら敵を避けて、一旦其場を引揚げました。

★奉天の巻★

そこで二月一日には、再び以前の計畫を以て、敵陣を襲擊しましたが、此日はまた非常な寒氣で、氷は足を嚙み、吹雪は面を切る斗り、其爲めに肝腎の戰場に出ない中に、凍傷で動けなく成つた者もあつた位、實に困難を極めましたが、その困難を耐へ忍んで、やつとの事で敵前まで進めば、またもや後方の部隊が續かず、折角思ひ

立つた第二の襲撃も、遂に中止せねば成りませんでした。

かう云ふ風で、捗々しい戰爭の出來ないのも、全く此所の守備隊が、まだ少數であつた爲めでしたから、それと見て取つた敵軍は、何で又猶豫をしませう。遂に二月四日を以て、城廓から三里前の、凹子嶺のわが前哨線を奪ひ、其勢でまた城廓へ來襲しました。

✽城廓の敵襲✽

然るに此城廓には、我が野戰砲が新たに備へてありましたから、飽くまで我を侮つて來た敵を、手近の距離まで引付けた所で、一度に火蓋を切つて放しますと、それには敵も不意を喰つて、上を下へと狼狽へ出し、只の一發も放し得ず、散々の體で逃げ出しましたから、其虛に乘じて我兵は、手强く敵を追擊し、遂に此方面の敵をして、再び來襲する事の出來ない程に、首尾好く擊退してしまつたのであります。

そこで我軍は、更に其歩を進めまして、今度は敵の要害と恃んで居る、清河城占領の計畫に掛りました。

第十二章　清河城の占領

★奉天の巻★

抑も清河城と云ふのは、城廓を去ること北へ十里、太子河上流の右岸にある敵壘で、四方を連山で圍まれ、道は太子河に沿ふた所に只一筋通じて居ると云ふ、天然の要害でありますが、其地形が何と無く旅順に似て居るので、また小旅順とも呼んで居る、その一番高い所に、塹壕を二段に構へて、其形が鉢卷をした樣ですから、我軍はこれを鉢卷山と名付けました。

地は已に此通りの要害です。其所へ又敵が、半永久の防禦を施し、一萬七八千の兵を以て、嚴重にこれを守つて、撫順方面に於ける防禦地の中でも、最も大切なものとして居たのです。

されば我最右翼軍は、まづ最初の小手試しに、此の地を是非とも

奪はねば成りませんから、彼の城廓方面の敵襲を、全く撃退した後更に二月二十日を以て、進んで葦子峪、小高力營の線に出で、二十一日には千合嶺、傅家樓子を占め、二十二日には金斗峪、灣柳家を略し、次の二十三日からは、いよ〳〵清河城の攻撃に掛りました。

此日は生憎朝からの大雪、只さへ道の阻險な所へ、太子河の氷は所々融け初めて、迂濶に之を渡つて行けば、直ぐ凍傷に冒かされますから、これには橋を架けねば成らず、諸隊の運動の困難は、實に非常なものでありましたが、堅忍なる我兵は、此等の勞苦を事ともせず、やがて其日の正午頃には、鉢卷山の敵の陣地と、五百乃至千米突を隔てゝ、相對す迄に進みました。

見渡せば敵の陣地は、堡壘、塹壕、掩蓋の設備の外、近傍の樹木を伐り倒して、巧みに鹿砦を置き、鐵條網を張り、頗る嚴重に構へて居りますけれども、勇猛なる日本軍の前には、『その鹿砦も楊枝同

然、鐵條網も燈心の如くだ、一舉に踏み破つて乘り込め！』と、我が左翼の一部隊は、峨々たる山地を踏み越えて、やがて南方の懸崖に取りつき、猛烈に突擊を試みましたが、足場が惡くて思ふ樣に働けず、其内に日は暮れてしまひました。

明くれば二十四日、我軍は更に勇を鼓して、早朝から攻擊を續け右翼は東方の山地から、左翼は西南の傳家樓子から、面も振らず攻め掛けましたが、敵は去る者、四門の機關砲の銃口を揃へて、斷間無く我が頭上に砲彈を浴せ、必死に成つて防いで居ります。

其中に我が突擊隊は、獅子奮迅の勢を以て、高地の南側から攀ぢ登り、漸く頂上に達したと思ふと、例の機關砲はこれを待ち受けて、猛烈に射擊を加へましたから、流石に一歩も進みかねて、再び懸崖に取り着いたまゝ、空しく隙を覗つて居りました。

此時我攻擊部隊には、先に旅順の要塞戰に、十分經驗のある工兵

隊が、同じく參加して居りましたが、此體を見ると、悶しく思ひまして、決死の勇士二十八人、澤村特務曹長を最先に、手に〳〵爆發藥を持つて、敵の防禦物を片端から破壞し、一條の通路を開きますと、突擊部隊は一齊に、此の通路から亂れ入つて、驚き騷ぐ敵兵を縱横無盡に突き立てましたから、さしも頑强なる敵兵も、忽ちに崩れ初め、遂に此城に火を放つたまゝ、我先にと逃げ出しましたので、我は勢に乘つてこれを追ひ捲くり、遂に全く占領したのは、午後六時頃でありました。

かくして小旅順の清河城は、二日間の攻擊で、首尾よく我手に乘取りましたが、二十六日には又追擊戰に移つて、西河嶺、大嶺を奪ひ、進んで馬群丹に向はうとしました。

恰も此時、大山滿州軍總司令官は、此の方面の戰況を察して、時分は好しと思ひましたから、兼て計畫して置いた、奉天進擊の大運

動を、我が全軍に命じました。

思へば先の黑溝臺、次の清河城の激戰は、奉天進擊の大煙火に、恰も導火を點けたものであります。

第十三編　奉天の巻（下）

第一章　最右翼軍と右翼軍

天然の要害に、人工の防備を盡して、小旅順とさへ呼ばれた清河城も、川村大將の率ゐて行つた、我が最右翼軍の鋭鋒の下に、僅か一月より支へ得ないで、とう〳〵破られてしまひましたが、この清河城の占領は、奉天大戰の序幕として、最も面白く、又最も價値のあるものでした。

されば此方面に成功した、最右翼軍の主力は、更に破竹の勢を以て、二十六日には三龍峪、五龍口を占領し、進んで二十八日には、はや馬群丹の東南の高地、救兵臺の敵を相手に、猛烈な戰鬪を開きました。

然るに敵は優勢でもあり、味方は地理が惡かつたので、思ふ樣に捗取りませんから、なまじ無理に勝を急いで、兵を損じるのも得策で無いと、此所に暫時鋒を收めて、凡そ二週間斗りは、敵と只睨み合つて居たのです。

此時に當つて、その隣の右翼軍は、先に清河城の陷落した日から、前進運動を起しまして、揚大人山の東北、五道嶺の高地を奪つて、二十六日には王富嶺に向ひ、勇敢なる戰鬪の後、此邊の丘陵脈を占領しましたが、翌二十七日には、北王富岑の頂上さして、突擊を試みる事になりました。

所が此日は非常な大雪で、それに風が劇しく吹き添ひましたから、進軍が頗る難澁で、只さへ險しい山路は、動もすると足場を失ひ、千丈の谷に轉げ落ちさうです。

其所でまた山上の敵は、虛に乘じて銃口を揃へ、頻りに俯射を試

みますから、いよ〳〵突撃が困難でしたが、それにも屈せず勇氣を鼓して、勢鋭く攻め付けますと、流石の敵も逃場を失ひ、此所に居合はせた敵兵は、殘らず降伏してしまひました。

で、北富王嶺高地も、これで首尾好く手に入りましたから、此所に一日英氣を養ひ、やがて二十八日には、全力を擧げて高臺嶺を攻めました。

けれども敵陣は、この高臺嶺を初めとして、東の方幾ケ所にも連なり、救兵臺から馬格山までも、遠く大兵が控へて居りますので、こは侮れずと見て居ります中、敵は果して此日の午後、馬群丹の西南の、三家子方面から進んで來て、我が先鋒の小原隊を窘めました。

其所で我が軍は、一部を割いてその援護に當て、他の諸隊力を合はせて、明くれば三月一日の、日もまだ昇り切らぬ中から、車東嶺の敵を擊ち、大いに之を惱ませました。

然るに此時、高臺岑の東南の高地は、まだ占領して居りませんでしたから、此所にあつた敵の機關砲は、横から我が隊を亂射して、後方との連絡を斷たうとします。

これを見て我兵は、『なにを小癪な！』と云ひながら、更に此高地に向つて、劇しく突擊を試みましたが、何分敵は機關砲と云ふ、鋭い武器を持つて居りますので、心ばかりは焦つても、身はその彈丸に擊ち立てられ、斃れる者數を知らず、見る〳〵中に味方の死骸は、此所彼所に山を積んで、慘烈極まる有樣となりました。

第二章　高臺嶺の激戰

かくて三月一日は、苦戰の中に暮れましたので、翌二日も朝から晩まで、全力を盡して此高地を攻め立て、半分以上は奪ひましたが、まだ敵は踏み止まり、例の機關砲の猛力を以て、我が兵を傷ける事

殆ど目も當てられません。

其所で次の三日には、左翼に向つて石橋隊は、全部此所に死盡すとも、此地を奪はねば置かぬと云ふ、非常な決心を持ちまして、無二無三に突擊し、大いに敵を驚かしましたが、此爲に島田大佐繁)は敵彈に中つて斃れ、續いて聯隊の指揮を取つた、田中館少佐佳橘)の如きは、自分の大隊を擧げて突進し、群がる敵と渡り合ひ、遂にその一人と刺し違へて討死しました。

それを見て部下の兵士は、隊長殿の仇討ぞと、忽ち決死隊を組みまして、三度まで敵陣に突貫しましたが、それでも陣地を奪ふ事が出來ず、果は身に傷かぬ者は、僅かに三分一に成つてしまひました。

恰も此時、我が總司令部から、この方面の急を聞きまして、直ちに援護に向へと云ふ命を、最右翼軍に下だしましたから、粟飯原少將(常世)の部下の一隊は、小原隊の一半と合して、小原枝隊を編成し

四日の午前に楊大人山を發して、馬群丹へと向つたのです。

されば此の小原枝隊は、五日の夜明に東孤岑に向ひ、更に井口嶺の敵を攻擊しましたが、この井口嶺の敵は、頗る頑强に戰ひましたので、此爲めに小尾騎兵大尉は、南部中尉(伯爵利祥)を始め、中隊幹部の將校等と共に、此所で名譽の戰死を遂げました。

けれども突擊功を奏して、遂に此所の高地を占領し、此に依て其後は、馬群丹の敵の陣地を、一と目に見渡す事が出來たと云ふ、非常な便利を得ましたので、軍司令官は其の勳功を賞し、小尾中隊分南部中尉に、其場で感狀を送つた位です。

さて小原枝隊は、此の苦戰の結果として、最右翼軍との連絡も通じ、茲に兩軍相應じて、敵に當る事に成りましたから、戰鬪は漸く捗取つて、六日七日の兩日には、北大嶺附近を始め、頭道勾の敵を擊退し、遂に翌る八日には、馬群丹北方の敵の防禦線は、悉く我が

占領する所と成りました。

然るに此時まで、此方面の戰鬪が、種々な困難に妨げられて、思ふ樣に捗取らなかつた爲めに、其の影響は右翼軍に及ぼし、その中央縱隊の、粟飯原隊の如きは非常な苦境に陷りました。

一體この粟飯原隊は、二月の二十五日から動いて、三月の一日には、東勾山を攻擊する手筈でした。されば其午前の中に、東勾河の流を亂して、敵前渡河を試みやうとしますと、車頭嶺にはまだ敵が居て、砲擊を以てその渡河を遮り、また前樓子勾からは、歩兵を以て逆襲して來ますので、遂に前岸に達する事成らず、翌二日まで待つて、左方の島村隊と力を合せ、漸く無事に河を渡り、其の勢で長勾東方の高地を奪ひ、更に進んで正午頃には、東勾山の敵を前に、近きは七百米突、遠きは千五百米突の處まで、見事に占領してしまつたのです。

處がその前面は、見上るほどの絶壁で、もう一歩も進めません。さて何したものと、少し途方に暮れて居りますと、それを見た敵の砲兵は、例の車頭嶺の陣地から、猛烈な射擊を初め、まづ粟飯原隊の頭上から、無遠慮に火の雨を降らせました。實に此砲擊には、我軍も非常に苦められ、進退此處に谷まつて、見す〳〵その半分以上は、此處で砲彈を浴びせられて、或は斃れ、或は傷き、僅かの時間に負傷者は、實に三百餘に上つたのであります。

第三章　崩れ始めた敵の足並

此時黑木司令官は、此の方面の難戰を見て、まづ右翼隊を東勾河の左岸まで引揚げ、紅帽隊の名を轟かした、近衞師團の渡邊部隊を唐家屯の北方高地へ進め、五日の夜の明けぬ中に、石灰窰、胡家臺の北方高地を、大方占領させました。

すると、此軍の正面の敵は、六日頃からそろ〳〵退却を始め、翌七日の如きは、紅帽隊の前面に、例の白旗を押し立て、死傷者の收容の爲め、暫時休戰を申込みましたから、直ちに承知して、此方でも戰場の整理に掛りました。處が午後の六時頃、卽ち休戰の約束の時刻が、まだ切れるか切れない間に、敵は突然火蓋を切つて、我が不意を討ちましたから、我軍は其卑怯を憎み、直ぐに應戰しやうとしますと、こは如何に、今度は敵の後方に當つて、俄かに火の手が揚りました。

其處で渡邊部隊は、何か仔細のある事と、急いで二組の將校斥候を出し、敵の樣子を搜らせましたら、敵は先刻の射擊を以て、一時我軍の目を眩まし、其間に陣地に火を放つて、さつさと逃げてしまつたのであります。

で、康大人山、營盤、康寧營等の、一帶の敵地は凡て火に成り、

焰は晝の樣に天を焦がしながら、はや敵は一人も見えませんから、我軍は直ぐに追擊命令を發して、逃げる敵をば追駈けました。

一體この方面の敵は、クロパトキン將軍の、初めに全力を擧げて居た處なのです。されば我が軍の之に當る者は、隨分困難を極めまして、爲めに損害も少くありませんでしたが、その優勢の敵にして、かく俄かに退却を初めたのは、如何云ふ理由でありましたらう？

それは他でもありません。丁度此時分、我が滿洲軍の最左翼に向つた、例の乃木大將の大兵團が、さながら嵐の野を吹く如く、奉天城の西四里斗りの處まで、幕地に突進して行きましたので、『さては城廓方面へ來ると思つた、彼の旅順の猛將は、却つて我が背後を衝く氣であつたか？』と、初めて悟つたものですから、流石のクロパトキンも大きに狼狽へ、周章てゝ此處の陣地を拂つて、左翼及び中央の一部を、皆奉天附近に集め、此處の防禦に當らせたのです。

然るに其兵は、此間からの戰鬪で、只さへ疲れて居ります處へ、また不意の命令で、無理な運動をさせられましたから、もはや思ふ樣に働けません。

其中に、沙河線の兵力は、大分薄く成つて來ましたから、忽ち我軍に乘せられて、中央から切斷され、此處に足並が亂れ始めると、次で沙河堡、韓城堡の防禦線まで、我軍の占領する處と成り、兼て中堅と恃んで居た、萬寶山の敵陣も、今は風前の燈と成りましたから、第三軍の指揮を取つた、ビルデルリング將軍も、一旦其旗を捲いて、退却しなければ成らなく成つたのです。

第四章　左翼軍と中央軍

是より先敵の不備を衝いて、クロパトキンに一泡吹かせた、我が最左翼の大兵團は、直に二月廿七日を以て、媽々街を進發しますと、

彼のクリッペンベルグ將軍の據つて居た、長灘、羊魚泡、小新民屯邊から、大民屯に至るまでの、各村落を跋涉にて、頻りに敵を求めましたが、至て小勢の騎兵隊の他には、少しも抵抗する敵もありませんので、さながら無人の境を行く樣に、大手を振つて前進し、越えて三月四日には、奉天の西凡そ四里斗りの、後民屯、前民屯、德勝營子の線に達し、鐵道線路を前に大展開を試みました。

すると、丁度これと前後して、敵は左翼、中央から別れて、頻りに此方面へ向つて來ましたから、茲に初めて大衝突を來たし、互ひに力戰奮鬪して、まだ勝敗も見え兼ねました。

其處で大山總司令官は、豫て渾河の左岸に置いてあつた、奥大將の左翼軍を、更に渾河右岸に進めて、最左翼軍と連絡させましたから、此部隊は、三月三日の曉から、蘇胡堡萬家園子の線を奪つて、段々渾河の右岸に出たのです。

此時また、野津大將の中央軍は、三月一日頃から活動して、まづ萬寶山の敵陣を的に、重砲の射擊を初め、これを以て敵を正面に牽制け、其間に左翼軍の戰線の、次第に前進するのを見て、大久保中將の部隊を左翼から廻して、遙に最右翼軍と應じて、そろ〳〵敵を包みにかゝりました。

處が、奉天を守つて居た敵は、元より其の精を集めたものですから、堅牢な陣地と、鋭利な武器とを力に、頗る頑强に防戰して、屢屢我軍を惱ませますので、其爲めに攻擊が捗取りません。

殊に最左翼軍の如きは、何分優勢の敵を相手にするので、動もすれば利を失ひ、果は少からぬ損害を受けて、十日には一旦背進せねば成らなく成りましたが、恰も好し、此の時彼の大久保部隊は、勇戰奮鬪の効あつて、此朝奉天の城壁まで突進し、午前十時頃には、はやその南門を奪ひましたから、これに氣を呑まれた敵兵は、忽ち

白旗を飜へして、總數一萬五千人、殘らず降伏してしまひました。

其機に乘じて又最左翼軍も、猛烈な攻擊突進を試み、漸く敵を破りましたが、其間に立つた左翼軍は、中央と最左翼とを助けて、最も巧みに戰鬪し、大いに成功を速めましたので、やがて總司令官から、名譽の感狀を授けられました。

が、一面この大激戰に依て、奉天城の一角を破り、まづ敵の首力の上に、一大打擊を與へました間に、逸はやくも敵の背後に廻つて、その退路を遮りに掛つたのは、彼の右翼の黑木軍でした。

第五章　萬寶山攻擊

今その右翼軍の戰況を記す前に、此處に陣べなければ成らぬのは、中央軍の最も力を注いだ、萬寶山の攻擊であります。

抑も萬寶山と云ふのは、先に沙河會戰の際、山田枝隊の苦戰をし

た處で、而も忠勇なる鵜澤大佐を初め、幾多の猛將勇卒の、恨を呑んで戰死した處です。

然るに敵は、今度此處に堅牢な工事を施し、五重六重にも鐵條網を張りつめて、機關砲、野砲を十分に備へ、又麓の胡老屯には、堅固な角面堡を築いて、これを前進陣地とし、その防備の整つて居る事は、殆んど他に比を見ぬ位、實に此處を中堅と恃んで居ました。

されば野津司令官も、此の敵を攻撃するには、特に將士を選びましたが、選ばれて枝隊の長と成つたのは、兼て驍勇の名を轟かした、少將今橋知勝と云ふ人で、之に隨ふ前田、丸山の兩隊も、共に數度の激戰に參し、軍中の花と歌はれた、名譽の聯隊斗りでありましたから、何で逡巡ふ事のありませう。即ち三月一日の曉方、攻撃前進の命令と共に、北長嶺の陣地を發して、平山から瓦家堡に出で、漸く敵に迫らうとしました。此日敵の砲彈は、頭上に雨と降りかゝりましたが、味方はわざと力を蓄へて、容易に火蓋を切らなかつたのです。

明れば二日、いよ〳〵攻撃に掛らうとしますと、生憎風が南に變つて、而も激しい吹雪に成り、少しも前が見えません。

が、これぞ襲撃には却つて便利と、味方は更に奮ひ立ち、まづ前田隊は右翼に、丸山隊は左翼に、兩方から進撃して、一氣に小東溝を奪ひ、更に胡老屯の角面堡に向ひました。時は午後の二時であります。

すると敵は、降雪に我兵の所在こそ見えざれ、その襲撃をはや悟りましたから、胡老屯は云ふに及ばず、萬寶山の本營からも、重砲野砲を初めとして、機關砲、小銃に至るまで、有りと有らゆる武器を揃へて、息をも次がず射撃を始めましたから、我隊は之が爲めに、忽ち死傷の算を亂だし、中にも丸山隊の先鋒になつた、大久保大尉

の中隊の如きは、中川小隊長以下、百二十餘の死傷を生じた位です。けれども味方は少しも屈せず、尙勇奮突進して、遂に敵の最前線たる、散兵壕を奪ひました。

此時今橋少將は、戰列の後方にありながら、頻りに號令を傳へて居りましたが、やがて午後四時頃、敵の飛ばした一彈が、頭の上で爆發した爲に、名譽の負傷をしましたが、傍に居た副官は、爲めに戰死を遂げたのであります。

で、今橋少將負傷の後は、前田大佐が之に代つて、この枝隊の指揮を取り、猶も猛烈に攻撃しましたが、何分堅牢な陣地に據つて、頑固に抵抗する敵の事ですから、急には追拂ふ事が出來ず、僅に一の散兵線を奪つては、辛くもホット息を入れ、又進んで一壕を取つては、此處に疲を休めなどして、ヂリ〳〵と攻め寄る斗りでした。また敵はと見ますと、胸突く斗りの堅壘の上から、眼下に我兵を

見下だして、大小の彈丸を自由に降らせ、少しでも前へ出れば、忽ち微塵に碎かうと構へます。

せめては日の暮れるのを待つて、夜襲を試みやうとすれば、敵に嚴重に警戒して、少しも隙を見せません。

實にかう云ふ有樣で、僅か百米突の近間に進みながら、容易に突撃する事も出來ず、遂には前後六晝夜の間、空しく苦戰を續けたのであります。

が、これでも此の堅固な壘は、まだ陷れる事が出來ませんでした。

然るに敵は、此の方面でこそよく支へたれ、他の右翼、左翼の方面は、既に我が爲めに破られて、頻りに退却を初めて、その上この萬寶山と並んだ、柳匠屯の陣地の如きも、五日の朝には持ち切れなく成つて、我が右翼軍の手に取られ、また西部漢城堡は、我が左翼軍に奪はれましたので、敵も今は耐へ兼ねて、特み切つた萬寶山を

棄て、後方さして退却しましたから、此機失ふ可らずと、我が枝隊は奮ひ起つて、忽ち此處を占領し、更に追擊に移りましたが、何を云ふにも此時は、凡そ一週間斗りと云ふもの、敵の眼下に立つたまま、飲食も思ふに任かせず。夜も碌に眠らずに、只狹い土囊の蔭、乃至塹壕の底に斗り、身を屈めて居たものですから、この俄かの前進に、心斗りは焦つても、手足が妙に痺れてしまつて、急には活潑に働けなかつたと云ひます。

此の萬寶山の攻擊は、奉天の大會戰の中、最も苦戰を極めたもので、隨つて此の方面に向つた、今橋枝隊の辛勞は、實に一通りではありませんでした。

第六章　李官堡の難戰

萬寶山の苦戰と共に、同じく記憶せねば成らぬのは、李官堡の難戰であります。

初め李官堡、楊士屯の攻擊は、最左翼軍の役目でありましたが、此邊一帶の防備は、意外に堅固に出來て居るので、急に攻破る事が出來ず、また此處で手間取つては、例の包圍の機を誤ると云ふ、虞もあつたものですから、其處で最左翼軍は、此の方面を左翼軍に讓り、自分は直ちに北進して、敵の背後を包みにかゝりました。それは三月二日の事です。

其所で左翼軍は、直ぐに最左翼軍の後を引受けて、この二ケ所を攻擊しましたが、此時楊士屯には、黑溝臺で猛戰した、立見縱隊が之に當り、また李官堡の方面には、大島中將(義昌)の第三師團が、總豫備隊から轉じて向つたのです。

然るにこの李官堡は、元と奉天の西面を掩護すべき、敵の要所でありますから、其の天然の險阻を利用して、嚴重に防備を構へ、南

方三軒家から張子屯に亙る線に、豫め大兵を配置し、李官堡高地、及南李官堡の西端に、一個の角面堡を築いて、散兵壕と聯結させ、其上要地々々には、十分に砲列を敷いて、如何なる勇兵猛軍と雖も一歩も踏み入れさせまいと云ふ、恐ろしい意氣組であります。

これに對して、我軍の向ふべき地は、一望明け開いた平原で、何の據るべき物も無く、敵の擊ち出す彈丸には、とても避けやうも無いと云ふ、不便極まる所ですから、これを攻擊する困難は、初めからよく解つて居りました。

けれども元氣天を衝く斗りの、忠勇なる我兵は、やがて此平原に土囊を積んで掩堡を築き、辛くも陣地を作つて、遂に七日の明方を待つて、一齊に攻擊を開始しました。

此時攻擊隊の指揮を取つたのは、少將南部辰丙でありましたが、其左翼は竹內聯隊、右翼は吉岡聯隊で、初は李官堡と三軒家に分れ

兩隊それ〴〵進行して、敵前三百米突に及んだ頃から、更に激烈な射擊を受けましたけれども、我はまだ之に應ぜず、ま〴〵猛進を續けます所へ、敵は突進して來ましたから、忽ち一場の搭鬪戰を演じて、やがて吉岡聯隊は、三軒家を占領してしまひました。

又李官堡の敵は、土壁に據つて頑强に防戰しますので、容易に突入する事は出來ませんでしたが、更に豫備隊の力を併せて、猛烈なる攻擊の後、一旦は南部李官堡の一端を、奪ひ取る事が出來たのです。

所が本壘に據る敵は、更に砲兵の力を假つて、激しく逆襲して來ますので、我は急射擊を以て、頻りに追拂はうとしますけれども、優勢な敵は數線に分れて、さながら潮の寄せる樣に、盛り返へし、盛り返へし、幾度となく押して來る斗り、その度に兵力を增して、我が陣地を包みに掛り、今は三軒家の占領地までも、甚だ危く見え

て來ました。

されば味方の將卒は、此所を先途と防ぎ戰ひ、必死に成つて働きましたが、次第に旗色面白からず、果は聯隊長吉岡中佐(友愛)まで、自ら軍刀を閃かして、敵に渡り合つて居る中に、あはれ彈丸に貫かれて、壯烈な最期を遂げ、又左翼の竹内隊長(武)も、身に五個の敵彈を受けながら、尙戰線を退かず、劍を杖にして部下を指揮し、辛くも此所に踏み止まつた位、その難戰苦鬪の程は、實に目も當てられぬ有樣で、現に或る中隊の如きは、僅に二三十人を殘して、他は皆斃れたと云ふ事です。

此通りの有樣で、李官堡の攻擊は、頻々と來る敵の逆襲を、一々擊退はしましたけれども、其度に味方を損じて、遂に我が一部隊は、全く死地に陷つてしまひました。

事此所に及んでは、もはや武運も是までと、竹内隊長は慨然として覺悟を定め、まづ地圖や重要の書類を、火に投じて燒き棄て、副官齋藤大尉を以て、此方面の危急をば、本部の南部少將まで知らせました。

「其所で齋藤大尉は、圍を衝いて一算に、旅團本部へと駈け付けまして、途中で數ヶ所に重傷を負ひながら、辛くも報告の任務を全うしました。

けれども如何云ふ都合でしたか、やがて其日は暮れやうとするのに、本部からの沙汰は無く、隨つて銃丸の補充が、まるで出來なく成りましたから、今は只手を束ねて、敵の餌食と成る外はありません。

其時また此隊の、大隊長大越少佐は、更に竹内聯隊長と謀つて、再び本部に急を告ぐべく、自ら使者に立ちましたが、これも忽ち重傷を受けて、進退の自由を失ひ、遂に途中で自殺してしまひました。